

JAPAN FOUNDATION  国際交流基金

地球市民賞

フォローアップイベント — 多様な文化の共生 —

2018.6.29 FRI | ワークショップ
海外移住と文化の交流センター

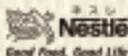
2018.6.30 SAT | 公開シンポジウム
デザインクリエイティブセンター神戸

主催: JAPAN FOUNDATION  国際交流基金

共催: 地球市民賞 公開シンポジウム実行委員会
実行委員代表 田村 太郎(ダイバーシティ研究所 代表理事)
兵庫県受賞団体 6団体(受賞年順)
公益財団法人PHD協会
特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター
特定非営利活動法人 芸術と計画会議(C.A.P.)
特定非営利活動法人 ダンスボックス
特定非営利活動法人 プラス・アーツ
特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター

後援: 兵庫県、兵庫県国際交流協会、神戸市、神戸国際協力交流センター、関西SDGsプラットフォーム

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

協力: ネスレ日本株式会社  Nestlé Good Food. Good Life.、阪急阪神ホールディングス株式会社、P & G ジャパン 

運営協力: アイセック神戸大学委員会 NEST 

地球市民賞

フォローアップイベント

目次

公開シンポジウム

| | |
|--|-----|
| 登壇者プロフィール | P.4 |
| ご挨拶 柄 博子 国際交流基金 理事 | P.9 |
| 田村 太郎 実行委員代表 国際交流基金地球市民賞選考委員 一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事 | |

オープニングセッション P.10

「国際都市神戸のこれまでの歩みとこれからの可能性」

登壇者

| | |
|---------------------------------------|--|
| 植松 賢治 神戸市市長室 国際部長 | |
| 河合 誠雄 P&G ジャパン ガバメントリレーションズ シニアマネージャー | |
| 永田 宏和 特定非営利活動法人 プラス・アーツ 理事長 | |

第1セッション「震災の経験から」..... P.14

登壇者

| | |
|-------------------------------------|--|
| 大城 口クサナ 特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター 理事 | |
| 八木 浩光 一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団 事務局長 | |
| 吉田 恵美子 特定非営利活動法人 ザ・ピープル 理事長 | |

モデレーター

| | |
|--|--|
| 田村 太郎 実行委員代表 国際交流基金地球市民賞選考委員 一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事 | |
|--|--|

第2セッション「人と社会をつなぐアートの可能性」..... P.19

登壇者

| | |
|---|--|
| 下田 展久 特定非営利活動法人 芸術と計画会議(C.A.P.) 代表 | |
| 山野 真悟 認定特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター 事務局長 | |
| 横堀 ふみ 特定非営利活動法人 ダンスボックス プログラムディレクター | |

モデレーター

| | |
|--|--|
| 荻原 康子 公益財団法人 墨田区文化振興財団 常務理事 元国際交流基金地球市民賞選考委員 | |
|--|--|

第3セッション「社会を拓く多文化パワー」..... P.24

登壇者

| | |
|---|--|
| 岡崎 広樹 芝園団地自治会 事務局長 | |
| 金城 ナヤラナツミ 特定非営利活動法人 ブラジル友の会 理事 | |
| フフデルゲル 特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター ゼネラルマネージャー | |

モデレーター

| | |
|---|--|
| 藤沢 久美 シンクタンク・ソフィアバンク 代表 国際交流基金地球市民賞選考委員 | |
|---|--|

クロージングセッション:「神戸宣言」の発表 P.30

| | |
|------------|------|
| 「神戸宣言」 | P.32 |
| 参加受賞団体感想 | P.33 |
| 参加者アンケート結果 | P.35 |

ワークショップ

| | |
|-------------------------|------|
| はじめに | P.36 |
| 企業の取り組みの紹介 | P.37 |
| グループディスカッション:企業との協働について | P.38 |
| フィールドトリップ | P.40 |
| 参加団体プロフィール | P.42 |
| フォローアップイベント参加者 | P.46 |
| 運営協力いただいたボランティアの皆さん | P.47 |
| 終わりに | P.49 |

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

登壇者プロフィール



実行委員代表 国際交流基金地球市民賞選考委員
一般財団法人 ダイバーシティ研究所 代表理事

田村 太郎

兵庫県伊丹市生まれ。高校卒業後、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南米などを旅する。在日フィリピン人向けレンタルビデオ店で勤務することで、日本で暮らす外国人の課題を知る。阪神・淡路大震災直後に外国人被災者へ情報を提供する「外国人地震情報センター」の設立に参加。1997年4月から2004年3月まで(特活)多文化共生センター代表として同センターの成長に立ち会った。2004年4月からIIHOE研究主幹として、NPOのマネジメントサポートや自治体との協働にテーマを移し、民間非営利団体の立場から地域社会を変革するしくみづくりに取り組む。また、2007年1月からダイバーシティ研究所代表としてCSRにおけるダイバーシティ戦略に携わる。2011年3月、東日本大震災を受けて、「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト(つなプロ)」、スペシャルサポートネット関西の発足に関わり、それぞれ代表幹事、世話人を務める。また、内閣官房に発足した「震災ボランティア連携室」で企画官に就任。被災地のニーズ把握や震災ボランティア促進のための施策立案に参加した。2012年2月より復興庁上席政策調査官となり、14年4月からは復興推進参与としても東北復興に従事する。



総合司会
特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター 常務理事

吉富 志津代

名古屋外国語大学世界共生学部教授。在神戸アルゼンチン総領事館など中南米の領事館秘書を経て、1995年の阪神・淡路大震災後は、外国人救援ネットやFMわいわいの設立に参加。その市民活動の延長で、主に多言語環境の促進や外国にルーツを持つ青少年育成のための活動を切り口に、多文化共生社会の実現にむけた外国人自助組織の自立支援活動に従事する。その他の役職はNPO法人多言語センターFACIL理事長、兵庫県長期ビジョン審議会委員、移民政策学会理事など。神戸大学修士(国際学)、京都大学博士(人間・環境学)。

オープニングセッション

<登壇者>



神戸市市長室 国際部長
植松 賢治

兵庫県神戸市出身。関西学院大学法学部を卒業し、1985年神戸市役所に入庁。西区役所まちづくり推進課長、シアトル事務所長、環境局環境貢献都市担当部長を歴任。2015年4月から神戸国際協力交流センター常務理事に就任し、新たに外国人市民と日本人市民が英語で意見交換する「神戸コミュニティフォーラム」の開催や外国人市民の日本語学習支援の拡充など市内在住外国人への支援の強化に取り組む。2018年4月より現職。



P&Gジャパン
ガバメントリレーションズシニアマネージャー
河合 誠雄

カナダ・トロント生まれ。トロント大学大学院卒業後、P&Gに入社。日本カナダ会の代表など、社外で数々の役職を歴任する一方で、国・地域の競争力の向上とともに、それに欠かせない世界を舞台に活躍できる次世代の人材育成をライフワークの一つとしている。兵庫県立大学にてグローバル・リーダー育成ユニット(現:グローバル教育プログラム)の立ち上げに関わるほか、他大学でも講師を勤め、国際都市神戸の英語教育を考える懇話会やひょうごツーリズム戦略推進会議の委員として社会制度の在り方についても発信している。



特定非営利活動法人 プラス・アーツ 理事長
永田 宏和

1993年大阪大学大学院修了。2005年の阪神・淡路大震災10周年事業で、家族が楽しみながら防災を学ぶプログラム「イザ!カエルキャラバン!」を開発。2006年、特定非営利活動法人プラス・アーツ設立。現在、首都圏、関西圏など全国各地や、インドネシア、タイ、フィリピン、中米、南米など海外での防災教育普及に積極的に取り組む。東京ガス、東京メトロ、三井不動産グループ、無印良品、NHKなど企業・メディアの防災アドバイザーも数多く務めている。TBS「情熱大陸」、日本テレビ「世界一受けたい授業」出演。

Photo by Yoshiaki Tsutsui AXIS

第1セッション「震災の経験から」

<登壇者>



特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター (兵庫県) 理事 大城 ロクサナ (Ajipe Oshiro Roxana Angelica)

ペルー出身。秘書専門学校卒業後、貿易会社勤務を経て1991年来日。1995年の阪神・淡路大震災後、被災者としての経験を生かし、2000年度よりFM わいわいにてスペイン語番組担当と同時に、TCCにて南米出身スペイン語圏住民の自助活動を開始。その延長線上で2011年に「ひょうごラテンコミュニティ」を独立させ、代表として、相談事業、スペイン語情報誌の発行や母語教室などの活動を継続している。その他、FM CO・CO・LO スペイン語番組担当など。



一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団 (熊本県) 事務局長 八木 浩光

熊本出身。1997年より事業団で国際交流事業を通じ、熊本市の活性化と発展を推進。多文化共生分野では、県立大学で「生活者としての外国人のための日本語教材」作成を指導。2010・2015年に、「県内における生活者としての外国人への日本語教育に関する考察」を発表。熊本地震時に外国人避難対応施設および災害多言語支援センターを運営。事業団が2016年度国際交流基金「地球市民賞」を受賞。現在、多文化共生の拠点となる日本語教室の地域展開など、外国人・日本住民が普段から共に支え合える地域づくりを推進している。



特定非営利活動法人 ザ・ピープル (福島県) 理事長 吉田 恵美子

福島県いわき市において、古着のリサイクルなどを通じた住民主体のまちづくりを目指して1990年から活動する「特定非営利活動法人ザ・ピープル」理事長。長年にわたり市内外に古着回収用ボックスを設置し、年間260トンの古着を回収、再資源化に取り組む。また、その収益金の社会還元として、タイ国山岳民族に対する教育支援などを行ってきた。東日本大震災後は、救援物資としての古着提供を皮切りに被災者・避難者支援事業を展開。オーガニックコットンの栽培を通して、震災後の地域農業とコミュニティの再生を目指す取り組みも行っている。いわきおてんとSUN企業組合の代表理事も務める。

<モデレーター>



一般財団法人 ダイバーシティ研究所 代表理事 田村 太郎

プロフィールは、P.4を参照

第2セッション「人と社会をつなぐアートの可能性」

<登壇者>



特定非営利活動法人 芸術と計画会議(C.A.P.) (兵庫県) 代表

下田 展久

1957年川崎生まれ。1979年、アルファレコードよりアルバム「ムーンダンサー」でレコードデビュー。1988年、神戸ポートアイランドのジーベックホール設立準備に参加し、2000年まで同ホールのプロデュースを担当した。1997年、震災をきっかけに始まった日仏芸術家の交流活動「アクト・コウベ・ジャパン」の事務局を勤める。1997年よりC.A.P.(芸術と計画会議)に参加。2000年、ジーベックから親会社のTOA株式会社に異動。2002年、C.A.P.の法人化を機に会社を退職し、C.A.P.専従職員となる。2015年よりC.A.P.代表。



認定特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター(神奈川県) 事務局長

山野 真悟

1950年福岡県生まれ。1978年よりIAF芸術研究室を主宰、展覧会企画などを行う。1990年ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局長に就任。1990年より隔年でまちを使った美術展「ミュージアム・シティ・天神」をプロデュース。「まちとアート」をテーマに、プロジェクトやワークショップなどを多数手がける。2005年「横浜トリエンナーレ」キュレーター。2008年より「黄金町バザール」ディレクター、翌年黄金町エリアマネジメントセンター事務局長に就任。2014年度(第65回)芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2016年横浜市文化賞受賞。



特定非営利活動法人 ダンスボックス(兵庫県) プログラム・ディレクター

横堀 ふみ

神戸・新長田在住。劇場Art Theater dB神戸を拠点に、滞在制作を経て上演する流れを確立し、ダンスを中心としたプログラム展開を行う。同時に、アジアの様々な地域をルーツにもつ多文化が混在する新長田にて、独自のアジア展開を志向する。ベトナム人の夫をもち、一児の母でもある。

<モデレーター>



公益財団法人 墨田区文化振興財団 常務理事 元国際交流基金地球市民賞選考委員

荻原 康子

複数のアーティスト・イン・レジデンスに関わった後、INAX文化推進部、キュレーター・オフィスに所属。2001年、企業メセナ協議会入局。顕彰事業、機関誌、セミナーなどを担当するほか、会員企業のメセナプログラムに企画協力。2011年、事務局局長就任。「東日本大震災 芸術・文化による復興支援ファンド」をはじめ、新たな助成制度の設立に携わるとともに、企業や文化機関、自治体などへの提言、コンサルティング、調査などを推進。2017年6月より現職。

第3セッション「社会を拓く多文化パワー」

<登壇者>



芝園団地自治会(埼玉県) 事務局長

岡崎 広樹

埼玉県上尾市出身。1981年生まれの36歳。現在、芝園団地自治会事務局長。2014年から川口芝園団地に住み始めて、自治会役員として地域の実情を知る中で、自治会だけの地元づくりの限界を痛感。住民自治を原則に地元内外の組織や外部の大学生と協力しつつ、外国人住民を交えて地元づくりをする「開かれた自治会構想」を推進している。



特定非営利活動法人 ブラジル友の会(岐阜県) 理事

金城 ナヤラナツミ

5歳で来日。高校生の時から両親が結成した団体(ブラジル友の会の前身)が運営するブラジルにルーツをもつ子ども達のための放課後学習支援教室でボランティア活動に従事する。大学在学中に同学習支援教室に高校生の部を創設、コーディネーターを務める。2017年金城学院大学大学院社会学専攻修士課程で修士号を取得後、愛知県庁多文化共生推進室で多文化共生推進員として勤務し、日系ブラジル人高齢者、ブラジル人学校について現状調査などを行う。2018年より美濃加茂市の児童発達支援事業「エスペランサ美濃加茂」の立ち上げに携わる。



特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター(兵庫県) ゼネラルマネージャー

フデルゲル(呼和徳力根)

1981年中国・内モンゴル自治区バーリン生まれ。内モンゴル大学卒業。2005年に来日し、国際語学学院で日本語を学ぶ。2010年神戸市外国語大学大学院修士課程を修了後、神戸定住外国人支援センターの活動に加わる。ヘルパー2級、介護福祉士、介護支援専門員の資格を持つ。現在、同センターにて居宅介護部門、中国残留邦人帰国者交流会などを担当する。

<モデレーター>



シンクタンク・ソフィアバンク 代表 国際交流基金地球市民賞選考委員

藤沢 久美

国内外の投資運用会社勤務を経て、1996年に日本初の投資信託評価会社を起業。1999年、同社を世界的格付け会社に売却後、2000年にシンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画し、現在代表を務める。政府各省の審議委員や日本証券業協会公益理事などの公職に加え、豊田通商など上場企業の社外取締役を兼務。1000社を超える経営者インタビューやダボス会議などを通じて、国内外の官民協働支援に取り組む。近著は、『あの会社の新人は、なぜ育つのか』(ダイヤモンド社)。『すぐやる人の“超えてる”思考法』(三笠書房)など著書多数。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

ご挨拶

主催者代表挨拶

国際交流基金 理事 柄 博子

国際交流基金では1985年度から全国の地域の優れた国際交流活動を顕彰する地球市民賞を実施しており、これまでの受賞団体は100を超えております。過去の受賞団体を振り返って見えますと、時代と共に地域の国際文化交流の変遷が見てとれると思います。2016年度からは全国各地の受賞団体の皆さまにパートナーになって頂き、地球市民賞のフォローアップ事業を開催したいと考え、第1回は富山県南砺市にて、「文化・芸術による地域づくり」の推進をテーマにワークショップとラウンドテーブルを行いました。第2回目となる今年は阪神・淡路大震災をきっかけにNPOの活動が深化した神戸市にて、多文化共生をテーマに一般には非公開のワークショップに加え、初めて公開のシンポジウムを行うこととなりました。

留学生、移住者、技能実習生の増加に伴い、多文化共生の必要性が高まるばかりの昨今ですが、本日、全国で活躍されている受賞団体の代表者にお集まり頂いたこの機会に情報やアイデアをシェアすることで、皆さまの今後の生活や活動のヒントになればと思います。今回のシンポジウム開催にあたり多大なご協力を賜りました地球市民賞選考委員で、実行委員代表の田村さん、神戸の受賞団体の皆さまをはじめ、兵庫県、神戸市、関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

企画趣旨説明

田村 太郎

今回のシンポジウムを開催するにあたり、どういうテーマでどのように議論し、どのような発見を持ち帰って頂くか、神戸の受賞団体の皆さんと、去年から真剣に議論してまいりました。

本日も、登壇者の皆さんは短い時間の中に盛りだくさんの内容を準備して臨んでおります。地球市民賞は1985年から現在まで100を超える団体が受賞していますがそのうちの7つが神戸市の団体です。単独の基礎自治体では最多です。

昨日から神戸以外の過去の受賞団体の方々にも来て頂き、神戸ではなぜ国際交流活動が盛んなのか、どのようなヒントがあるのか議論をしました。

ひとつのキーワードは「震災」です。阪神・淡路大震災によって様々な活動が横断的につながったことは、間違いなく神戸で国際交流活動が活発である一つの要素だろうと思います。また、150年前に開港して以来、様々なものを取り入れて成長してきたまちであることもポイントだと思えます。

本日のキーワードである「多様な文化の共生」、つまり「多文化共生」というこの言葉も、阪神・淡路大震災から私たちが紡ぎだしたものです。以前は、「在日外国人問題」という言い方でした。確かに今ある問題を取り上げることも重要ですが、これからの方向性、目指すべき社会を示したという点で画期的なことであったと思えます。

全国から集まって頂いている皆さまには、本日の議論をそれぞれの地域へ持ち帰り、それぞれの地域における国際交流活動の振興に生かして頂きたいと思えます。もちろん、神戸の方も神戸の今後の多文化共生や、国際都市としての新たな魅力づくりについても、大いに議論して頂きたいと思えます。

大震災から20年、皆、頑張ってきましたが、次の20年で神戸が目指すこと、そして国際交流や多文化共生をどう絡ませていくかという戦略はまだ練り切れていないように思えます。神戸だけでなく、それ以外の地域にとっても、今日のこの日がひとつのきっかけとなり、持ち帰って頂ける成果がたくさんある1日になるよう願っています。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

オープニングセッション

「国際都市神戸のこれまでの歩みとこれからの可能性」

概要：開港以来国際都市として発展してきた神戸の多文化共生の歩みを概観し、阪神・淡路大震災からの復興を経て、これからの都市が多様な文化の人が暮らしやすい魅力的なまちになるにはどうすればよいか、現状と今後の可能性について話し合う。

- ・神戸では外国人が日本人の中に溶け込んで生活
- ・阪神・淡路大震災の後、助け合いからコミュニティー団体へと成長
- ・とはいえ、いまだ外国人コミュニティーと日本人コミュニティーの分断もある
- ・つなぐ組織、つなぐ人が足りない。個々人のスキルやマインドも足りない

登壇者

植松 賢治(神戸市市長室 国際部長)
河合 誠雄(P&Gジャパン ガバメントリレーションズシニアマネージャー)
永田 宏和(特定非営利活動法人 プラス・アーツ 理事長)

永田：

ようこそKIITOへ。私はデザインクリエイティブセンターの副センター長も務めています。今日は、この後、各テーマ、フィールドごとにお話が進むと思いますので、オープニングセッションでは国際都市神戸についてもう少し大きく捉え、これまでの方針と今後の方向性について、皆さんとともに探ることができたらと思います。

では最初に植松さんより、国際都市神戸市のこれまでの歩みと今後の方針についてお聞かせ頂ければと思います。

植松：

神戸市は、2017年に開港150年を迎えました。神戸港を背景に居留地が展開されたように、神戸は開港によって国際化が進んだまちです。そういった歴史的な背景があり、**市内には48,000人弱の定住外国人が暮らしています**。兵庫県全体では10万人ですので、県下の半数がこの神戸市に住んでいることとなります。

神戸市にはもともと多くの領事館が設置されておりました。残念ながら地震の影響もあり、現在はパナマと韓国の総領事館が残っているのみですが、市内には関西領事団の事務局もおかれています。



神戸港の様子

震災の影響で数こそ減ってしまいましたが、領事館があるということは、外国人の生活を支援している証だと思っています。宗教施設の数も多く外国人学校は8校あります。

地球市民賞受賞の対象となるような市民のコミュニティ活動も活発です。「**外国人集住都市会議**」という言葉が聞かれたことがあると思いますが、**神戸の場合、集住というよりも外国人が日本人の中に溶け込んで生活していると認識しています**。阪神・淡路大震災の後、多くの助け合いの動きが生まれ、**コミュニティ団体という形に成長していきました**。現状、助け合うという精神は変わっていませんが、その性質には変遷があり、行政では賅いきれないところを担って頂いているように思います。

神戸市では我々国際部が外国人政策、留学生の支援などを企画立案しており、外郭団体の神戸国際協力交流センターが企画を実際に展開しています。ただし、それだけで足りるものではなく、コミュニティ団体の方々に助けて頂きながら、日本人にとっても外国人にとっても住みよい、選ばれるまちを推進していくことが、まさに国際性ではないかと思っています。

今後の展望の一つが、震災の際に支援して頂いた

経験や知見を世界に発信していくことです。もう一つは、文化交流以外にも、できるだけ地域の産業などに貢献できるような経済の交流にフォーカスすることです。こういった取り組みを、できるだけ広く市民や団体に助けて頂きながら進めています。

永田:

神戸市のお立場から、全体的な歩みと今後の展望についてお話し頂きました。



オープニングセッションの様子

まちづくりやコミュニティづくりには「土の人」「風の人」「水の人」の三つの存在が必要だと思っています。「土の人」は地域の人や地元の人、様々なきっかけで土地を訪れて刺激(種)を与える人が「風の人」、そしてその種を世話する人が「水の人」です。

さきほどお話をさせて頂いてわかったのですが、私たちは3人とも神戸が大好きです。私は大阪に住んでいるので、自分のことを勝手に「風の人」と呼んでいます。つまり、大阪から風に乗って神戸を応援しに来ていると思ってください。この三つの存在を背景に、国際都市神戸における定住について、企業目線での考えやアドバイスをお聞かせ頂ければと思います。

河合:

私は、小学生の時に日本に移り住みました。他の帰国子女の友達が疎まれたり嫌な目にあっている中、私自身は結構楽しく過ごし、むしろいい思いができたのはラッキーだったと思っています。ただし、それは自分の運のよさだけではなく、周りの人たちによって得られたものであると気づき、コミュニティを大事にしたいと思うようになりました。

現状、外国から来ている方は東京や横浜のほうが多く、横浜も港として大きいのですが、例えば買

物を例にとっても阪神圏のほうが多様性に慣れているという声を聞くことがあり、自分のことのように嬉しく、誇りに思っています。さらにそれが広まればという思いで、いろいろな取り組みをさせて頂いています。

永田:

国際都市というと、行政もメディアも必ずインバウンドを取り上げます。私の感覚では神戸、大阪、京都と並ぶ3都市の中で、神戸についてはあまりインバウンドの影響がないという話も聞かれ、これから力を入れていかなければならないと考えています。定住人口やインバウンドについて市の考えや、私たちが思うことについてお話できればと思います。

植松:

定住と一時滞在のインバウンドでは、基本的に目的も過ごし方も違うと思います。ご指摘どおり、大阪のインバウンドの伸び率は毎年何百%増という数字で、大阪のミナミなどでは中国人を中心にその数が伸びています。神戸では、昨年、観光目的で誘致を行う神戸観光局という部署を立ち上げ、インバウンド数の増加をめざしています。

初めて来日される方は、東京から京都、そして広島、姫路に向かういわゆるゴールデンルートで満足されますが、その中に神戸は入っておらず、魅力に気づいてもらえないという状況もあって、観光プロモーションをしています。確かに初めての方にも訪れてほしいという思いはありますが、もうひとつの観点では、あえて10年先にリピーターや旅慣れた人が訪れるまちとしての旅行先に選んでもらったらよいのでは、という思いもあります。神戸ビーフ、日本一の生産量を誇る灘の酒蔵、そして有馬の温泉などを活かしてお招きしたい。そのような形で誘客するのもひとつの考えではないかと思っています。量なのか質なのか、考え方はそれぞれですが、いずれにしても外国人の方々に訪れて頂きたいというのは、間違いのないと思います。

永田:

河合さんにもお聞きしたいのですが、多くの外国人が来ることによって表面的に国際都市と言われることと、その弊害についてはいかがでしょうか？

河合:

この中で最近京都へ行かれた方はいらっしゃいますか？ものすごい人混みですよ。私はできるだ

け行かないようにしています。お花見の時も、バスには乗らず地下鉄を利用します。

インバウンドが大事だと思うのはなぜでしょうか？**インバウンドを積極的に受け入れるかどうかについては、その目的をコミュニティの中できちんと考えてから展開する必要があります。**そうでないと、その恩恵を受けている人はハッピーだが、それ以外にとっては迷惑でしかないという、多くの国でみられる分断が起こります。コミュニティでみんなハッピーかどうかを考える必要があると思います。

定住についても、定住することだけが大事なのでしょうか？いわゆる昔ながらの外国人コミュニティと日本人コミュニティは、住むところも活動も分断されていて、いつまでたっても150年前の旧居留地の世界を抜けていません。**同じ思いを持っているコミュニティはつながればもっと面白いことができるのに、市主催のイベントも外国人向けと日本人向けで分けられていることがあります。**

こういった点について、個人的には変えていきたいと思っていますが、皆さんはいかがでしょうか。

永田：

お二人のお話を聞いていて、神戸はごちゃまぜ感があり、訪れると温かさを感じることも含めて、受け入れる土壌があるのだと思います。これは大事なことです。とはいうものの、神戸に係わる様々な仕事をしていて行き着く問題が、**つなぐ組織やつなぐ人が足りない**ということです。

観光でも福祉でも、中間支援のありようを含め、まだまだ変えていかなければなりません。こういうことについて、神戸は、東京に比べるとトライアルは進めやすく、何かやろうとするとすぐに地域の方がおもしろがって協力してくれます。そういうところが、神戸の魅力であり、**一部の人が恩恵を被る国際交流や国際化ではなく、皆がWin-Winでハッピーになれるようなことを創っていかねばと思います。**

では最後になりますが、こういう観点から、これから是非トライしたいことや、同じ意識を持った人たちへのメッセージをお願いいたします。

植松：

神戸市の事業も縦に割れているという点があるこ

とは、否定できません。

ニューカマーの方をつなぐことが非常に重要ですが、1回やればよいというわけでもなく、継続も含め、簡単ではないと実感しています。行政のみではなく地域の方と連携して進めないと、発信していくことも難しいと思っています。ただ、あきらめずに続けてやっていくことが重要であるとも思います。



日本語サポーター実践講座の様子

ただし、言葉の壁はどうしてもあります。日本で生活していくかぎりには日本語が必要です。神戸国際協力交流センターでは、ボランティアの方がマンツーマンで日本語を教える活動をしています。1か月に50件で、6か月、延べ300組が協力してくださっています。さらに人材の枠を増やしても、需要に追いついていません。ボランティアの方にはとても感謝していますが、そういう方に甘えるのではなく、やはり**政策として日本語を学ぶ機会をもっと作っていかねばならない**と思います。言葉がわからないと周囲とつながることができない。言葉というのは、決してそれが全てではありませんが、つないでいく必要性を強く感じています。**行政が下支えし、市民の方にできるだけご協力頂くというのが進むべき方向性ではないか**と思います。

河合：

日本は文化として良いポテンシャルを持っていると思います。いわゆる和を重んじる世界をベースとするのは良いことだと思うのですが、一番大きな問題は、**個々人のスキルとマインドが足りない**ということです。これは大人の責任だと思っています。ベースにある文化を大事にしながら、**その中で多様性を認める、そういったインクルーシブ・スキルが大事なのですが、そこがあまりにも不足しています。**

震災に関して東北で手伝いをしていて強く感じるのは、NGOの方々につながるスキル、あるいはインクルーシブのスキルが足りないという点です。思いが

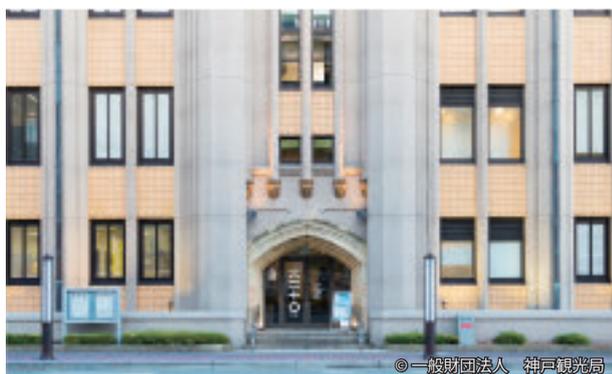
強すぎて、少しでもその思いと違うと受け入れることができず、活動が小さくなってしまいます。

神戸市と兵庫県は仲良しなので、比較的感じない部分ではありますが、行政や会社、組織の枠を越えると、途端に物事を進められなくなります。これはマインドとスキルの問題ですので、個人がつながる、コミュニティとしてつながる、そして個人がアクションを起こせるよう、微力ながらお手伝いをさせて頂けたらと思います。

永田:

オープニングセッションでも、「つながる」、「つながるために必要なこと」がキーワードとして挙がりました。

個人のスキルとマインド不足については私も共感しており、神戸だけでなく全国的に全く足りていないと思います。人材を作っていないといけない。それには、小学校、中学校、そして高校での教育が必要なのかもしれません。それから、つながる機会をつくるためのシステムが意外とないという壁にぶつかります。人がつなげばよいのかもしれないが、限界があるので、インフラなどの整備も必要ではないでしょうか。私はKIITOで活動をつなぐ事業をたくさん手がけており、勝手に「神戸モデル」と呼んでいます。この神戸モデルがまず神戸を元気にして、その先に全国に広がればよいと思います。



会場となったKIITO

このセッションでお二人とお話できたことも私にとっては素晴らしいつなぎの場で、何か一緒にできそうな気がしています。本日お越しの皆さんも含め、こういう場をこれからもどんどん作っていかれたらと思います。

以上で、オープニングセッションを終わりにいたします。ありがとうございました。

吉富:

キーワードは「つなぐ」、そのための人材とシステムということですね。国際都市神戸と言われてきましたが、阪神・淡路大震災で棲み分けのパターンが崩れて、おもしろいことが起きています。詳細は次のセッションに譲りたいと思います。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

第1セッション

「震災の経験から」

概要: 阪神・淡路、東日本、熊本、各地の震災経験と、それを契機に浮彫りになった地域が抱える多文化共生の問題点、解決に向けた取り組みを紹介するとともに、今後の課題や方向性について議論する。

熊本: 3つのつながりの重要性

- ・地域の中で外国人住民がパートナーとなること
- ・地域を越えた外とのつながりを広げていくこと
- ・被災地のニーズと外の支援とをマッチングするコーディネート

福島: オーガニックコットンプロジェクト

- ・ともに汗をかき、一緒にものを食べることでつながる
- ・自分たちの身におきたコミュニティーの課題に取り組むことで、世界中どこでもある地域の課題に取り組む知見を獲得

神戸: コミュニティーの災害に対する意識、日本語力向上が大事

- ・災害セミナーでは人が集まらない。食べながら、踊りながらのイベントに災害テーマを加える

登壇者

大城 ロクサナ (特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター 理事)

八木 浩光 (一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団 事務局長)

吉田 恵美子 (特定非営利活動法人 ザ・ピープル 理事長)

モデレーター

田村 太郎 (実行委員代表 国際交流基金地球市民賞選考委員
一般財団法人 ダイバーシティ研究所 代表理事)

田村:

オープニングセッションでも、つなぐことの重要性についてお話がありました。大きな災害は強制的に人と人をつなぎます。分断するようにも見えますが、つながります。つながらないと、どうしようもないからです。

もちろん辛いこともあります。阪神・淡路大震災では外国人の方だけで174人亡くなりました。しかし、例えば朝鮮学校の炊き出しに日本人の方が並ばれて初めて朝鮮の料理を食べておいしかったとか、東日本大震災の時も、熊本地震の時も、遠方から真っ先に炊き出しに来られるのは、だいたいいつもカレーを作るバングラデシュ人のグループなのです。南三陸では、「いつも食べているカレーとは違う味だけどおいしいね」と言いながら食べていらした方も、震災をきっかけに初めて外国人の

人とつながったということだと思います。

避難所では、同じ地域に住んでいながら知らなかった人たちが初めてつながって、一緒に地域をつくるきっかけになったということもあります。また、一度災害を経験された方が、別の災害の際に、行かずにはいられないというつながりもあります。そういう意味で、**災害はつながりを強制的につくる「暴力装置」**のような側面もあります。

では、まずお三方よりこれまでのそれぞれの経験から現在の活動についてのお話をして頂きたいと思います。

八木:

私たちは熊本地震での外国人被災者支援活動を評価して頂き、2016年度の地球市民賞を受賞しました。実は私たちは災害に備えていたわけではありませんでした。ただ、**普段から外国人の方とのつながりがあったから、うまく支援活動ができたのだ**と思っています。



熊本地震時の炊き出しの様子

それでは、熊本地震で感じたこと、学んだことについてお話します。まずは、物理学者の寺田虎彦さんの「天災は忘れたころにやってくる」、まさにこの言葉です。熊本で暮らしている人は皆、熊本は安

全だ、まさか地震が起きるなんて思っていなかったことでしょう。ところが、あの大きな地震が起きてしまったのです。

熊本では、130年ほど前に大きな地震がありましたが、それがいつの間にか忘れられていました。良いことだけでなく、震災経験のような悪いことも後世にしっかりと引き継いでいくことが大切であることを学びました。地球市民賞を頂いてから、なおさらこの経験を多くの地域の人たちと共有していかなければならない責務を感じています。

熊本地震のことはかなり報道されていますが、2年たった現在、熊本城は、土台の石垣部分がなくなった状態でまだ入ることができません。まちなかは、震災1年後くらいから空き地が増えつつあります。マンションやアパートでは、実は壁の中のパイプが破損していたことが後になってわかり、住めなくなって解体が進んでいます。熊本は古くからの城下町も多く、壊してしまったら元通りに町屋を復元できるのかという心配もあります。

吉田:

NPO法人ザ・ピープルは地域の中で循環型の社会を作ろうとする取り組みを通して、地域課題を解決していけるような住民主体のまちをつくりたいという趣旨で活動して参りました。その手法として選んだのが古着を回収し、それを燃やさずもう一度社会へ戻すという、古着のチャリティショップ運営です。この活動を通して得られた収益金で、地方からダイレクトにタイの山岳民族を支援してきました。今思えば、東日本大震災に至る20年間の活動の中で、手元にある古着が災害時に救援物資として活用できるのではないかと気づき、活動の一つとして災害救援を行ってきたことは一番大きなことでした。そのような中で地域を襲ったのが東日本大震災で、震災前の助走期間があったおかげで私たちは被災から数日で動き出すことができました。



古着回収・仕分けの様子

タイの山岳民族の活動を支援する一方、地域の国際化を進めたいという思いで、地域の団体とネットワークを組みながら、いわき地球市民フェスティバルを開催してきました。もともとは私たちの団体の活動を発表する場でしたが、震災後は地域に住む外国人の意見を募り、交流を図る場にしたいという意向があり、年代や経歴を問わず日本語を母語としない方のスピーチコンテストを開催するようになりました。

東日本大震災が、地域にもたらした大きな課題として、自然災害と人為的災害という全く異なる災害によって、被災者の方たちの立場の違い、扱いの違いなどが地域コミュニティに分断を生み出すということが起きました。もしかすると、外国人と日本人の間に起きる分断と同一のものが地域の中で日本人同士の間で起きてしまったのではないかと思っています。

こういった、表には見えない根深い問題に私たちなりに対処しようと思い、社会福祉協議会の傘下に入る形で災害(のちに復興支援と改名)ボランティアセンターを運営するなど、様々な活動に取り組んできました。

田村:

私は復興庁で福島から県外へ避難されている方への支援も手伝っています。多文化共生とからめて考えていると、人はなぜ分断されるのかと思うことがあります。結果、どちらも悪くなくとも分断されることがあるということがよくわかりました。残った人も、避難した人も、その価値観はそれぞれ正しいのに、相手を正しいと認めると自分が正しくないことを認めたとされるのではないかと、というようにおもんばかりすぎて距離が開いていく。これは、多文化の共生でも同じではないかと思っています。お互いに想像しすぎて、どんどん距離が開いていく気がするのです。どうすれば分断しなくていいのかを考えていく上で、このことは広く示唆を与えてくれているのではないのでしょうか。

では次に、大城ロクサナさんより阪神・淡路大震災の際の活動についてお話頂きましょう。

大城:

私はひょうごラテンコミュニティの代表として2000年から活動しております。今日は皆さんに外国人の立場について理解頂ければと思っております。

たかとりコミュニティセンターを初めて訪れたのは、相談者としてでした。当時は日本語が話せなかったこともあり、日本では避難訓練があるとか、災害時には避難所が設けられることも知りませんでした。自分のことで精いっぱいでしたが、同じコミュニティには、困っている方々がほかにもたくさんいることを初めて知りました。たかとりコミュニティセンターに毎日通うようになって約2か月後、ここにいらっしゃる吉富さんのお誘いもあり、コミュニティの困っている方を支援するためにひょうごラテンコミュニティを皆で立ち上げました。



様々な活動の中で、2年前からは、災害に対する準備にさらに力を入れています。たかとりコミュニティセンターのおかげで私は災害に対して多くを学び、日本語も話せるようになりましたが、ラテンのコミュニティ自体には災害について意識はまだまだ十分に広がっていません。そして他の外国人コミュニティも、同じ状況だと思いますので、これからの取り組みによって私たちのコミュニティがモデルになればと思っています。

そのために日頃からコミュニティで災害についての意識向上をはかり、災害にあった時に動ける人になってほしいという思いからいろいろ活動していますので、次のパートでお話します。

田村:

では「課題」と「これからの可能性」を合わせてお願いします。

八木:

熊本地震の時、地震自体を知らず、母国で地震を体験したことがない外国人の方が多くいました。揺れの中でどのように行動したらいいのかかわらず、途方に暮れている時、助けてくれたのは隣の日本人だった、ということを知りました。避難所の存在や、避難所で提供されているサービスを知らな

かった外国人の方が多くいました。避難所に入ったが、情報が日本語だけでストレスを感じて行ってしまう外国人の方も多くいました。話が逸れますが、先日大阪で地震が発生した際のテレビ番組で字幕にフリガナがあったことは、熊本地震からの大きな進歩だと思いました。

熊本地震では、20～30年と長期在住の外国人の方でも「給水」や「物資援助」など普段使わない日本語表現や漢字表記に戸惑いを感じ、避難所を出ていったケースが多くありました。また、避難所生活ではイスラム教の方など文化や習慣の違いから不便を感じるということもあったようです。これらの課題は総務省の情報コーディネーター検討会で、言語の壁、背景、知識の3つのニーズに整理されました。

課題解決のために各地の地域国際協会は、外国人の方とのつながりを構築しています。このつながりを地域に暮らす日本人・外国人住民間の直接のつながりに発展させることが今後の課題だと考えます。このつながりを熊本地震の経験を通して、3つに整理すると、次のようになります。

1つ目に、**同じ地域の中で外国人住民がパートナーとして暮らしていくことが大事である**ということ。2つ目に、大規模災害の場合など、地域内だけでは対処できない場合もあり、**普段から地域を超えた外とのつながりを広げていくことが大切である**こと。まさにこういった日本全国の集まりは新しいつながりを作る大切な機会だと思います。3つ目は、**被災地の住民のニーズと外の支援をマッチングさせるつながりのコーディネーション力**です。

地域内のつながりを広げていくためには、外国人・日本人住民同士の交流が基本となります。例えば、地域日本語教室です。単に日本語を勉強するのではなくて、様々なイベントを通じて、外国人・日本人住民がともに学び、支えあうことが大切です。地域外とのつながりは、お互いを知りニーズや気持ちを結び付けていくことが大切です。

熊本地震の際には、地域内外のフィリピンの方が炊き出しをしてくれたり、イスラムの方は全国のイスラム教徒から届いた物資を避難所に配って回ったり、多文化パワーのつながりが活かされました。避難所のステージの上で水を配っている様子を見ていたイスラム教の方は、翌日、家を個別に訪

れて水をペットボトルで配って歩きました。高齢者の方々がわざわざ重たいペットボトルの水を取りに来る苦労に気づいての行動には感心しました。



救援物資配布の様子

それぞれできることがわかった時に、地域とのつながりも生まれ、互いに必要としあうことで成長できます。外国人の方は、決して弱い立場ではありません。彼らは、日本人を支えてくれる立場にもなってくれます。熊本地震で触れた多文化パワーとつながりから、誰一人置き去りにしない社会づくりを目指していきたいと思います。

吉田:

まったく違う自然災害と人為的災害の被災者が共生せざるを得なくなった当時、原発事故の影響で地域農業が先行き不透明になったことで農業者が耕作を断念し、耕作放棄地が拡大するという問題も起きていました。そして、耕作放棄地で農作物が育つ情景だけでもみんなの力で取り戻せないかと始めたのが、有機農法でコットンを育てるふくしまオーガニックコットンプロジェクトでした。

現在、浜通りを中心としたエリア、双葉郡内、原発に近いエリアでもコットン栽培に協力して下さる農家の方が増えてきています。農業者、住民、避難者、遠隔地の方など、立場や置かれた状況の違う方々が23,000人。コットン畑で農作業をともにすることによってつながりを生み出しています。

復興支援ボランティアセンターの活動の一つとして、サロンを運営してきましたが、お茶を飲む場に集まる人々はなかなか増えていきませんでした。特に男性達はまったく来てくれません。結局、ともに汗をかき、お腹を減らして一緒にものを食べることで人はつながるのだという思いが強くなりました。その思いが生み出したのがコットン畑で立場の違う人たちが一緒に農作業をすることによ

って仲間になることを目指した「みんなの畑」という取り組みです。

私たちが育てているのは、^{びっちゅうちゃめん}備中茶綿という日本在来種の茶色いコットンです。製品は、育てたコットン100%ではありませんが、輸入された白いオーガニックコットンとミックスしても薄茶色になります。製品には、福島からのメッセージを込めて「ふくしま潮目」と名付けました。

名前の由来として、一つ目には、寒流と暖流がぶつかる豊かな福島の海、豊かな自然を表しています。二つ目はその豊かな海にたくさんの魚があつまるように、たくさんの人たちが仲間になってくれたという意味で人の集いを表しています。三つ目にはそれまで私たちが当たり前と思っていた社会のあり方をここから変えていきたい、つまり時代の潮目に立っているという思いを込めています。その三つの意味を込めて製品を生み出し、企業との協働も生まれてきています。

原発事故の前から地域で農業を営み、腕に覚えのある避難者のおじいちゃん、おばあちゃんたちは、自分たちの食べる野菜も作ろうと菜園を始めています。その方たちと一緒に、私たちは畑を耕し、夏祭り、収穫祭と食をともにする場を通して、仲間づくりをすすめております。



コットン畑にて収穫時の様子

私たちは、自分たちの身に起きたコミュニティの課題に取り組む中で、実は、世界中どこでもありうる様々な地域課題に取り組むためのひとつの知見を獲得しつつあるのではないかと考えています。実際、課題に立ち向かってきた姿勢を学びたいという研修を受けに来てくれる方々もいらっしゃいました。

福島の子どもたちがソーラーパネルを作る教室も

開き、ミクロネシアの学校や離島に設置する取り組みも始めています。震災の時にたくさんの人にお世話になった福島の子どもたちとともに、今度は恩返しとして支援事業を組み立てようと考えています。

大城:

まずは、**コミュニティの中で災害に対する意識を向上させる必要があります**。災害は命にかかわりますので、**日本語が話せないために何もできないというコミュニティにはなってほしくありません**。そのために、スペイン語で防災ガイドを作りました。Facebookにアップしたら反響があり、災害セミナーを開催して配布しています。

ただ、「災害セミナー」だけでは人があまり集まらないので、**食べながら、踊りながらの楽しいイベントに災害のテーマを追加**しています。今年で10回目を迎えるフィエスタ ペルアナ神戸には、ラテン系の人々を中心に毎年1,500人くらい集まります。今年**は消防署からゲストをお招きし、スペイン語通訳付きで防災について話して頂き、とても盛り上がり**ました。



田村:

たくましいですね。すごいなと思います。オープニングセッションと同じテーマが出ました。「つながる」というのが欠かせないキーワードだと思います。

阪神・淡路大震災は23年前のことですが、残念ながら災害のたびに同じことが起きてしまいます。なかなか改善されないのだと実感すると同時に、例えばテレビの字幕に振り仮名がついていた点など、少しずつ変わっているところもあるので、あきらめずに一生懸命やり続けることが大切なのだと思います。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

第2セッション

「人と社会をつなぐアートの可能性」

概要：地域の外国人コミュニティをはじめとするマイノリティの人々と社会との接点を設け、多様なものをつみこむ社会をつくっていくにはどうすればいいか。特にアートが持つ力、可能性に着目し、多様な文化をつみこむ社会づくりを考える。

- ・アートとは、多様なことを多様なまま展開できるメディア。ひとつの大きな声に回収されない
- ・わかりあおうとすることは大事だが容易ではない。異なりを尊重するプロセスに想像性をもつことが必要
- ・すぐ隣で働いている人たちの驚くべき話を個人的な深い体験として得られるのがアートの力
- ・地域と関係を作ることのできるアーティストの可能性
- ・アーティストが住みやすいまちは、多様な価値観を育める共生できるまち

登壇者

- 下田 展久 (特定非営利活動法人 芸術と計画会議(C.A.P) 代表)
山野 真悟 (認定特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター 事務局長)
横堀 ふみ (特定非営利活動法人 ダンスボックスプログラムディレクター)

モデレーター

- 荻原 康子 (公益財団法人 墨田区文化振興財団 常務理事
元国際交流基金地球市民賞選考委員)

荻原：

ここで言うアートとは、美術館で展覧会を観る、音楽ホールで音楽を聴くというものではなく、同時代を生きるアーティストが地域や様々な領域と生々しく関わっていく中から生み出されるアートのことです。アーティストが関わることで、地元の人が気づかない地域の魅力に価値を加えたり、歴史や人に寄り添って創造したり、あるいは課題を地域の方とクリエイティブに解決することもあります。まずは、芸術と計画会議(C.A.P)(以下、C.A.P.)代表下田展久さんにお話を伺います。

下田：

阪神・淡路大震災の前年、1994年に神戸で新しい美術館をつくる構想が持ち上がりました。その際、意見を求められた設立者が仲間に声をかけ、アーティストにとっての理想の美術館について提案書をまとめました。こうして現代美術作家が集まって結成されたのがC.A.P.です。住んでいる地域に美術家がいる、そのような方々が何を考え何をしよう



としているか、つまり地域で立ち上がるアートがわかる場所、そういった活動をバックアップできる場所が美術館だと考えました。しかし、直後に震災があり、計画は流れてしまいました。

震災の年の1995年5月頃、フランスのアーティストたちが実施した、「アクト・コウベ」の義援金を受け取り、建物を建てるのではなく、旧居留地を企業の方たちやまちなみをリソースに、まち全体に美術館機能を持たせようという旧居留地ミュージアム構想について市民の方と話し合うシンポジウムを開催しました。そのときに、今隣にいる山野さんに登壇頂き、お世話になりました。

このように会議ばかりをしていましたが、地震があり、フランスのアーティストからの支援もあり、市民参画の活動も行うようになりました。このような活動を続けるためには、経済的な支援の制度が必要だということになり、1996年春から旧居留地内の企業を中心に回って、活動を続けるための支援を募り、震災直後だったにもかかわらず多くのご賛同を頂き、サポーターシップを立ち上げることができました。その後、C.A.P.は美術家の集まりとして、社会と美術家のつながりを良くしていくことをモットーに活動を始めました。

2008年、ある日のミーティングで本日参加されている永田さんから、山の手にある古い建物を活用できないかというお話を頂き、自分たちが考えていたアーティストの理想のスペースを半年間実験してみようとCAP HOUSEというプロジェクトを立ち上げました。後に、そのビルは1928年にブラジル移住者のために建てられた旧神戸移住センターとわかり、思い出の場所を残してほしいという声もあって、プロジェクト終了後もC.A.P.が管理を引き受け、活動を続けてきました。建物は2009年から海外移住と文化の交流センターという市の条例施設になっています。日本の海外移住の歴史を紹介する博物館、ラテンアメリカ系の方の生活支援、C.A.P.の芸術の国際交流という3つの柱を担っています。



旧神戸移住センター



CAP HOUSE

当初の理想の美術館の話から20年近く経ち、こういう活動につながっています。また、施設の管理運営以外には、2016年より、ドバイ、ハンブルク、トゥルク（フィンランド）で活動する同様のグループとアーティストを交換し、やって来たアーティストと地域の人たちが一緒に活動しています。非常に実りが多く、手応えがありました。

山野：

黄金町エリアマネジメントセンターが活動する黄

金町には、2004年当時売春店舗が260件ほどあったといわれています。数千人の女性、特に外国人の方が24時間体制で就労していました。

当団体のミッションは「アートを通じ、創造的で特色のある界隈の形成を進める」。アーティストや地域、初黄日ノ出町環境浄化推進協議会、行政（横浜市、警察）、京浜急行、大学などと連携して活動しています。事業内容はアートからまちづくりにまたがり、黄金町バザールをはじめとしたアーティスト支援、特にアーティスト・イン・レジデンスに力を入れ、国内外の方に滞在スペースを提供しています。毎年9月から10月ごろ、まち全体が会場となる黄金町バザールを開催しています。本当はアートの割合を大きくしたいのですが、現状ではまちづくりの割合が大きく、エリアマネジメント、施設管理、協議会の事務局、商店会の事務局、防犯活動などを行っています。

一方で、アーティストの活動を見に来た子どもたちが一緒にものを作るようになり、そのうち時間と曜日を決めて工作教室を行うようになったという活動もあります。近くにある小学校の約3割が外国にルーツを持つ子どもたちです。学校での友達づきあいはわかりませんが、とにかく様々な国籍の子どもたちが集まります。



荻原：

C.A.P.はアーティストの集団ですが、活動しているうちにいろいろなことがつながってきたというお話でした。黄金町は、元違法風俗店街という地域の課題にアートを持ち込むという、クリエイティブシティである横浜市の文化政策の一環でもあったと思います。これからお話し頂くダンスボックスはもともと大阪で活動していましたが、神戸市が招致し、新長田に拠点を置くことになったそうです。9年目になる劇場の活動についてご紹介ください。

横堀:

ベトナム人である私の夫は、漁師の一員として長田港から出港する船に乗り、しらすを取っています。こういった個人的な事もダンスボックスの事業に絡んでくるのですが、事例を紹介するには時間が限られているので、違うアプローチから紹介したいと思います。

昨年11月、新長田一帯で下町藝術祭というアートイベントが行われ、ダンスボックスが事務局となりました。その中のパフォーマンス・プログラムで、マルチエスニックタウンである新長田の多様性にフォーカスした12のプログラムを上演、上映しました。ほとんどの作品はアーティストが新長田に滞在したり、通ったりしてつくったものです。

つなぎ手であるアーティストや関係者の方々から頂いた、アートならではの力や可能性を示唆する言葉を紹介します。ダンスボックスのホームページに掲載したインタビュー記事から抜粋したものです。



矢内原 美邦さん

(劇作家・演出家／アジア女性舞台芸術会議「悲劇のヒロイン」戯曲・演出)

「ベトナム語と日本語がかけあっていないと新しい交流として生まれていかないのではないかな。そこにコミュニケーションを生むために2つの違った言語でやりたいです。」

「今回は、新長田でベトナム移民の女性にインタビューして、戯曲は私が書きました。ただそのままの言葉だと戯曲になっていかないという大きな問題を抱えているので、それを自分の中で一回消化して新しい言葉として台本にしていくことをしました。」

「ここ長田でも、移民の6割、7割の追い込まれて日本に来ている人たちの声に応えることができない、何もできない自分がありました。ただその声は、必要な声だなと思いました。」

矢内原さんが演出した「悲劇のヒロイン」という作品は、この夏にベトナムのフエで再演が決定しています。

エグリントン みかさん

(演劇研究者・批評家・翻訳家／アジア女性舞台芸術会議「93 years, 1383 days」キュレーション)

「ある老婆の骨を洗うという、非常にパーソナルな営為によってベトナムの歴史が浮かび上がってくるようにも感じたのです。」

「生者の視点からではなく、死者の視点から生者の営為を見返している。」

ベトナム人女性が作った洗骨の儀式をテーマにした映像作品を、エグリントンさんがキュレーションされました。

アブ・ド・ラ・マドレーヌさん

(アーティスト／ダム・タイプ「S/N」映像上映のコーディネーター・ゲスト出演)

「夫婦でも、親子や兄弟姉妹でも、全く他人でもつながっている人たち。だから儀式っていうのは、作品であれ習慣としての儀式や風俗であれ、その周辺にいる人々が何かを共有するための人類の1つの知恵だと思うんです。」

筒井 潤さん

(演出家・劇作家・役者「滲むライフ」演出)

「僕の目を通してにはなってしまうんですが、描写することに執着することを心がけています。つまり、自分の思いをつたえることを、優先順位として高い位置におかないということです。実際にあるものをただただ映す。」

「誰かが優れていて、誰かが優れていないっていうことにしない。そのために細心の注意を払っています。」

「すべては見えないという事実が明らかになったときに、だからこそ対応できるメディアとしてあるのが芸術だと思うのです。その、すべては見えないという不安を抱えながら上演をすることも大事だと思います。」

ダンスボックスのプログラムを通して今考えていることは、アートとは多様なことを多様なまま展開することができるメディアであるということです。ひとつの大きな声に回収されない、しないということ。複数の言葉、身ぶり、思考が共にある、ましてや、生者のみならず死者の声も入れられること。これはアートならではのと思っています。もちろんわかり合おうというプロセスは大事なのですが、それは容易なことではなく、むしろその異なりを尊重するプロセスに想像性を持つことが必要だと思います。わからなさ、曖昧さ、危うさに決着をつけないこと。こういった活動はすぐに成果が出るわけではなく、時間をかけてみえてくるものだと考えています。

荻原:

アートというツールがまちの歴史や、人々が抱えている想いなどを増幅し、強い表現として見せてくれる。ダンスボックスのいろいろな活動をうかがって、アートにはそういった力があると思いました。

地球市民賞受賞団体の方々にお話を伺っていると、「寛容さ」という言葉がよく出てきますね。地域には、子どもから高齢者、障害のある方、そして様々なルールを持つ方々もいます。その**多様性をどう受け入れ、寛容であろうとすると、重要な役割を果たし、媒介者となるのが実はアーティストではないか**と思います。

これまでの活動を通じて、アートだからできたことや、まだできていないと思われることは何か、お聞かせいただけますか。

下田:

震災の際、「Acte Kobe(アクトコウベ)」のために活動を展開してくれたフランスのアーティストから、フラジリテ(危うさ)、クリエイティビテ(創造性)、ソリタリテ(連携)という3つの言葉を受け取りました。芸術と計画会議という名前の通り、会議をすることがメインの団体でしたが「話し合っているだけではいけない、やらなければ」という気持ちになりました。

不謹慎かもしれませんが、震災には、利害関係のある者同士が溝を超越して同じ方向を向かざるをえないような圧倒的なパワーがあります。また、フランスのアーティストたちに「神戸のアーティストって誰?」と聞かれて初めて「あ、自分たちかもしれないな」という意識が芽生えました。そういう外からの視点があることで、コミュニティとしての自覚が生まれたと思います。

もう一つは、あるアートプロジェクトの際に、通訳として関西ブラジル人コミュニティのインタビューを手伝うことになった時の話です。C.A.P.はその方々とは毎日話をしており、よく知っていると思っていました。ところが、学生時代から知っていたある女性の話を聞いて驚きました。彼女は国籍選択をするにあたり、父親に日本国籍を取るほうが将来のためにいいと言われながらも、ブラジル国籍であることの不利益を感じるセンサーになりたいとブラジル国籍を選択したのです。**すぐ隣で働いている人たちの驚くべき話をアートプロジェクトがきっかけで聞くことができました。違うレイヤーで**

活動をしていた人同士があるきっかけで知り合い、それが個人的な深い体験として得られるのはやはりアートプロジェクトがあったからだと思います。

荻原:

ふさがれていた回路を開いていく感じがあるように思います。では山野さん、アーティストが媒介者になることについて、ご意見をいただけますか?

山野:

私たちのNPO法人の事務局長は、自治体や警察と緊密な連携をとって動かなければならないので、寛容な立場には立てません。そういう意味でたまに辞めたいと思うこともあります。対照的なのがアーティストです。**地域の中には様々な人たちが住んでおり、例えばNPOが大嫌い、アートが嫌いという人もいます。しかし、アーティストは不思議なことにそのことに全く関係なく、誰とでも関係を作るのです。**極端な例かもしれませんが、私をナイフで刺そうとしたおじさんが、アーティストとは友達になってしまうのです。そこで、今何人かのアーティストと相談しているのが、NPOの活動に特に賛成ではない、どうでもいい、という人たちにインタビューし、アーカイブを残そうというプロジェクトです。子どもたちがいつの間にかアーティストになつて、一緒に工作教室を始めたという先ほどの話のように、アーティストであればこのプロジェクトはできると思います。**地域と関係を作るという活動の中で最近感じているのは、アートの可能性よりはアーティストの可能性です。**そのため、最近では地域住民としてアーティストが定住する計画を進めています。



黄金町BASEの様子

荻原:

地域における、いわゆるメディエーターという立ち位置ですね。ダンスボックスは、劇場そのものが地域の仲介者、媒介者のような気がします。



写真：岩本順平

下町芸術祭 | KOBE-Asia Contemporary Dance Festival #4
ジェコ・シオンボ&アニマル・ポップ・ファミリー神戸「神戸を前にして」

横堀：

そうですね、そういう場でありたいと思って、ダンス中心に展開しています。オープニングセッションで観光という言葉が出てきて、それは地域の「光を観る」ということだと思うのですが、その影を見るような場所が劇場であり、そういう意味では表裏一体なのだと思います。きちんと影が見られるような場所を作り、生きることに直接的に関わらないアートの存在意義をどのように伝えていけるか、できることを探っています。そこに住む人を支えられるような歌、音楽、ダンスなどチャンネルを多く作りたいのですが、チラシがまだ日本語のみであるなど、入り口にまだ課題があります。

荻原：

最後に、アートと社会の関わりについて、今後の可能性をお聞かせください。

下田：

今の活動を続けていきたいです。海外から来たいという方が増えていますが、作品を作って帰るだけではなく、町に住む人たちと関わり、課題の発見につながり、協力してその解決をする、そのような仲間を増やしていく活動ができればいいなと思っています。

山野：

世代交代や後継者問題という話が出ているので、それを解決したいと思っています。このNPO法人は行政と地域の皆さんが話し合って設立されました。自分たちが始めたということを行政も地域も世代交代をするなかで忘れないでほしいのです。また、いずれ治安の問題が落ち着いたら、アートNPOとしてエリアマネジメントセンターからアートセンターにしたいという構想も抱いています。

横堀：

様々なプログラムでまちなかをリサーチしていると、カラオケの人气が根強いようでした。ベトナム人やコリアンの方はカラオケが好きです。多様な言語が混じり合うごちゃまぜの紅白歌合戦カラオケ大会を開催してみたいです。

荻原：

アートやアーティストの可能性は大きく、行政やNPOなどのスタンスを軽やかに乗り越え、様々な人と関わっていける力があります。光を観るだけでなく、影の部分や課題にも臆さずに向き合い、共有できる形にする力もあり、やはりアーティストがまちにいることの役割と意味は大きいと思います。**アーティストは、そもそも独自の価値観を持ち、多様な価値観を受け入れる人たちですから、アーティストが住みやすいまちというのは、実は多様な価値観を育める、共生できるまちなのだと思います。**

吉富：

日常生活に直接関係ないかもしれないアートだからこそ、ものごとをつなぐ、素晴らしいツールになると思います。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

第3セッション

「社会を拓く多文化パワー」

概要: 多様な文化をつつみこむまちづくりを考えるときに、外国人住民がそれぞれの視点から主体的に参加することが欠かせない。外国人住民が主体的に参加するまちづくりを考える。

- ・「寛容さ」という言葉は素晴らしいが、自分事として考えた時どうなのか(本当に寛容になれるのか)
- ・ハナのような場所(外国人の要介護者を受け入れるところ)はこれからもっと必要になる
- ・外国人というだけで道が狭まってしまいう制度上の問題がある
- ・日本語で意思疎通ができたり、言葉ができなくてもフレンドリーなコミュニケーションがとれたりすると、好感が持て、「(〇〇人は...)とひとくりにしなくなる
- ・課題がたくさんある中、つながりをつくる人、震災の経験、アートによる手法、様々なものを活用していることが大切



登壇者

岡崎 広樹 (芝園団地自治会 事務局長)

金城 ナヤラナツミ (特定非営利活動法人 ブラジル友の会 理事)

フフデルゲル(呼和徳力根)

(特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター セネラルマネージャー)

モデレーター

藤沢 久美 (シンクタンク・ソフィアバンク 代表)

国際交流基金地球市民賞選考委員)

藤沢:

第3セッションは、外国人を受け止める日本人側の目線ではなく、外国人として日本にいらっしゃる方々がどのようなことを感じていらっしゃるかという視点から考えていきます。

岡崎:

芝園団地は、人口の半数以上である約2,500人が外国人で、その9割が中国人です。60代以上の日本人と30代以下の若い外国人が暮らしており、国際化と高齢化が進んだ近い将来の日本の縮図のようになっています。

外国人の方は生活習慣が違うため、ゴミ問題、騒音問題、そして今でこそなくなりましたが、階段の踊り場にされる大便や小便の問題など、様々な問題が起きました。「寛容さ」という言葉は大変素晴らしいですが、自分の住んでいるところで、同じこ

とが起きたら皆さんどう感じるでしょうか。

地域の居住空間に外国人が増えると、生活習慣の違いが顕在化するので、どうしても問題は起きてしまいます。起きて普通だと思っています。その時、どうしても両者の間に大きな溝、目に見えない心の国境が生まれてしまいます。その心の国境をつないでいかない限り、非常に難しい状況が続くわけですが、まるで両者が分断しているようにも見えますが、どこかでお互いに知り合うこともないわけですから、むしろ普通の状況が起きているとも言えます。そこで、外国人の方も活躍できてお互いに協力できる、そんな地域づくりが必要ではないかと考え、地元の団体、地元外の団体、地元外の学生(12大学約30名)のボランティアの力を借りて、交流の場づくりをしています。



かけはしプロジェクトの大学生の様子

一番重要なのは、日本人と外国人の間につながりを作ることです。顔が見える関係を築くため、芝園多文化交流クラブを創設し、中国人住民が先生を務める中国語教室を開催したり、外国人向け自治会パンフレットを日本人と外国人が一緒につくったり、中国のSNS「ウェイシン」を使って地域の情報を日本語と中国語で発信したりしています。外国人の方も活躍でき、互いに協力できる場をつくることで、顔が見える関係を築く接点ができるわけです。こういったことが少しずつできるようになり、自治会の中に外国人の役員も誕生しました。

金城：

私は、日系ブラジル4世で、5歳の頃に来日しました。ブラジル友の会は、岐阜県美濃加茂市で2000年に日系ブラジル人の子どもを持つ親で作られた団体で、当事者だけで作られた団体としては岐阜県唯一です。元々は、ポルトガル語を忘れていく私を含めた数人に向けて、母がポルトガル語を教え始めたのがきっかけでした。同時に、日本の学校に通い始めた私が勉強についていけないのを見た両親が地域の日本人ボランティアを集めて放課後学習支援教室も始めました。



ポルトガル語教室での様子

ブラジル友の会は、2006年に法人格を取得しました。外国人の子どもへの学習支援、就労支援、生活相談、多文化交流事業とともに、2009年4月にはリーマンショックで失業した方への情報提供、マナー講座などを行う多文化交流センターを開設しました。2012年度からは、高校学習支援教室も始め、最終的に25人が大学へ進学し、そのうち5人がブラジルの大学へ進学しています。美濃加茂市の産業祭では、ブラジル料理の店を出店し、地域の日本人にブラジルを知って頂くという活動もしています。

フフ：

私は中国の内モンゴル出身で、神戸定住外国人支援センター（以下、KFC）の職員をしています。KFCは震災による長田のベトナム人支援と、在日コリアンのグループとの統合によって結成されました。デイサービスセンターハナの会は1999年に始まり、デイサービスやケアマネージャーだけでなく、残留孤児の調査や帰国者の交流会なども行っています。

まず、皆さんに、**外国人の高齢者介護の事例**を紹介したいと思います。**認知症の症状としては、これまでできていた日本語でのコミュニケーションが取れなくなる**こと、統合失調症になって大声で怒鳴りながら毎朝団地の中を歩くこと、情緒不安定になること、そして65歳という年齢ではまだ体力があるので徘徊範囲が広くなったり、暴力を振るうことなどが挙げられます。一方で、ある意味頭はしっかりしているので、介護施設ではいじめられるから行きたくないと言ったりします。いろいろなところに相談してもどうにも手立てがなくてハナの会に来たわけですが、こういう方がひとりでもいると、地域や多くの人を巻き込んで大変なことが起きるのです。

ハナの会では、中国、ベトナム、韓国、日本と文化背景が様々なスタッフがこのような人たちを支えています。けんかは毎日のように起きていますが、何か起きても皆寛容に過ごしています。在日コリアンや残留孤児含め、外国人で65歳以上の高齢者は5万人以上にのぼります。ドライブや散歩など介護保険以上のこともやらなければなりません。皆さんが元気であることが心の支えになっています。ハナみたいな場所が、これからもっと必要になるのではないかと思います、紹介させて頂きました。



ハナの会の様子

ところでもうひとつ、公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団が実施する、「介護福祉士養成のための奨学金給付制度」という介護福祉育成の専

専門学校を対象とした奨学金には国籍要件があります。実際の介護現場では外国人スタッフが働いていますし、介護福祉士はどなたも取れ、専門学校では多くの外国人が学んでいる状況ですので、KFCとして国籍要件は撤廃すべきとの要望を出しました。最終的には来年度から撤廃することになりました。こういったことが様々なところで起きているので、社会全体の理解と支援が必要だと思います。

藤沢:

キーワードは「寛容」でした。岡崎さんからは芝園団地のような状況で寛容さを持てるのかという問いかけがありました。一方フフさんのお話では、けんかをするけれども寛容だということでした。この違いについて、さらに深めていきたいと思います。

また、フフさんが国籍要件に対する要望書の話をしてくださいましたように、国籍が障壁になってしまうことはたくさんあると思います。きっとナヤラさんもフフさんも外国人という理由で寛容さが感じられない場面に直面されたことがあると思います。日常の生活でのご経験を教えてください。

金城:

私は日本の大学院を卒業しましたが、アパートを探すのも就職するのも、**外国人というだけで道が狭まる**と痛感しました。不動産屋からは、外国人だからアパートは貸せないとか、日本に来てそんなに勉強をする必要があるのかななどと言われたことがあり、このまちに住む意味すらわからなくなったことがありました。中学3年の時には、先生に「あなたは外国人で、どうせ工場で働くのだから高校に行く必要はないでしょ」と言われました。子どもによってはその一言で諦めることもあります。先生方は子どものチャンスを奪わないよう責任を持ってほしいです。



藤沢:

ナヤラさんのご自身の意志で来日されたわけではなく、ご両親のご都合でいらして日本で育ったわけですが、子どものころに受けた一言は、人生を大きく左右することがあると思います。そういう先生は、外国人に対してだけでなく、日本人に対しても「あなたは歌が下手だから…」なんてはっきり言っているかもしれません。日本人や外国人といった区別のないことが寛容につながる気がします。フフさんにとって、日常生活で大変なことはありますか？

フフ:

中国残留邦人の高齢者の通訳について、その方はコップにお茶葉を入れて飲んでいました。すると、何年も担当しているケアマネージャーが「この人、認知症が進んでいるから」という判断で話をされて驚きましたし、同じお茶の飲み方をする私のおじさんも認知症になるのかと思うとショックを受けました。ある地域ではそれが普通の飲み方ですから、外国人はやはり理解されていないのだと思いました。このことがきっかけで、介護の仕事に本腰をいれることになりました。

それから、私の子どもは今2歳で、電車などでよく泣きます。日本人である妻は、そのことにとっても気を遣います。「子どもが泣くのは仕方ないのでは」と言っても、妻は「迷惑をかけるから」と言うのです。確かにそうですが、子どもに対しても寛容さが必要ではないかと思います。

藤沢:

フフさんとナヤラさんのお話を伺うと、生活習慣や文化の違いに気づかないことが理由になっているもの、それどころか外国人ということだけが理由になってしまう理不尽なものがあるのだと思います。岡崎さんはまさにその間の活動をされているのでしょうか？

岡崎:

おっしゃる通りです。生活環境の変化を経験したのが日本人なので、その視点から言えば、子育ても終わり、夫婦で静かな老後を過ごそうと思っていたところ、空いた部屋に外国人が引っ越してきて、外国人が原因かどうか明確にわからないけれども、これまでになかった問題が増えていきました。つまり、日本人住民は偏見とか差別ではなく、実際に迷惑を被ったという不満や怒りを抱いたわけです。一方で、外国人がお子さんを外で遊ばせていると、

日本の高齢者の方に「うるさい」と怒鳴られることがあります。しかし、怒鳴られた方はその理由がわからずに、ただただ不安になります。このように、日本人には不満や怒り、外国人に不安が広がりやすいのは、生活習慣の違いによって問題が起きてしまうことに原因があります。これは良い、悪いを超えている部分で、どうすればよいのだろうかといつも思います。

藤沢:

どうされているのですか？

岡崎:

いろいろな方と顔見知りになるよう努力して、様々な意見を聞いて対処しようとはしているものの、最近はずがに疲れてきて、お互いの違いを埋めることの大変さを実感しています。

例えば何か起こると、日本人は外国人がやったと言い、外国人は日本人がやったと言うのです。

ウェイシン(SNSグループ)でのやりとりを見せて頂く機会がありましたが、団地で物がなくなれば「暇な日本人がやったに決まっている」といった具合に展開しているわけです。これも良いとか悪いという問題ではなく、むしろ人間が普通に感じる怒りや不安が募ってしまった中で、批判の矛先がお互いに向きやすくなってしまうことが一番難しい問題のようです。

藤沢:

日本人も外国人も、どちらも被害者のようになっていますが、子どもの頃から日本で育ちながらブラジル国籍もお持ちのナヤラさん、ご自身のお立場からどのように考えていらっしゃいますか？

金城:

私が住む地域はとても田舎なので、共生といっても、とても難しいです。子どもの頃はアイデンティティに悩んでブラジル人であることに恥を感じたこともあります。今はブラジル人であることで経験も広がり、むしろ強みとして誇りに思っています。ただ、日本で生きていく上では、制度上、外国人であることが不利になることがあり、日本に帰化すべきか悩んでいるところです。

藤沢:

フフさん、帰化についてどのようなアドバイスをされますか？

フフ:

私も最初は日本人になろうと努力しましたが、それがストレスになっていました。育児中に鬱うつになった友人や、店長になった途端鬱うつになった男性もいて、私自身はどうなっていくのだろうと思った時期がありました。いくら頑張っても、外国人は外国人で日本人にはなりきれないわけですから、外国人のままでもいいと開き直りました。国籍をとるのはいいと思いますが、自分は自分のままという気持ちは持つべきだと思います。



ハナの会にて日本語学習支援の交流会の様子

日本国籍を取った90代の在日コリアンの方は、今も悩んでいます。韓国籍の人たちとも違い、かといって日本人にもなり切れない。でも国籍を変えるのは大変だったわけですから90代になっても悩み続ける現状があります。

藤沢:

自分という一人の人間の中でも寛容にならないといけないというような、とても大切なことをおっしゃって頂きました。ナヤラさんとフフさんに伺いますが、なぜ日本で生きようと思われるのですか。

金城:

日本には21年住んでいますが、2年前、20年ぶりにブラジルに帰ったら自分の国ではない感じがしました。私の国は日本だと思いますし、日本が好きです。ただ、声をあげたくても外国人という理由で、政治参加もできないことがあります。

藤沢:

ブラジルのお友達に、日本で人生を過ごしたいと相談されたら、どうアドバイスされますか？

金城:

日本に来る時は自分の国を捨てるという覚悟をしていると思いますが、ブラジルでは日系人は日本

人として扱われることが多くても、日本に来れば外国人になるという事を理解して来るべきだと伝えたいです。

藤沢:

覚悟してほしいということですね。ブラジルでは日本人と言われ、日本に来れば外国人と言われるわけですから、非常に複雑ですね。その環境を作ったのは私たち日本人で、皆で訪れた移民のセンターのような場所で学ぶことが大事ですね。フフさんは、いかがですか？

フフ:

私は、日本は良い国だと思います。例えば100円ショップもあってお金がなくても生活に困らないですから、少なくとも物質的にはモンゴルとは比べ物にならないほど豊かな国だなと思います。神戸も、山や遊ぶところがあって住みやすいです。

ただ、ハナの会の中でよく言われているのが、日本人には本音と建前があって、外国人と直接的に言い合えないということです。つまり、壁があって互いに溶け込めないのです。共生というのは、直接本音を言うことで生まれると思っています。建前を捨てないと、言葉が本当なのか不安になります。

藤沢:

建前ではなく口に出してみることで、相互理解が始まるのではというご提案を頂きました。フフさんのお話にあったハナのように、「けんかはあるが、寛容」である社会を作る一つの方法でしょうか。

岡崎さん、寛容が広がっていくという意味で、何かいい例はありますか？

岡崎:

最近感じるのは、お互いの距離が近づくと難しさが露呈するということです。2010年ごろ、夜中に爆竹を鳴らしていたので注意したら殴られたことがあった、という話を日本人住民から聞いたことがあります。また、両者の違いというのは習慣だけでなく世代の間にも生じると感じています。特に高齢の日本人と若い外国人の間では顕著です。近づけば近づくほど差がよくわかることもあるので、直接言えばいいというものでもないと思います。

もうひとつは、交流の場づくりによってわかってきたことがあります。今までは、外国人と一括りに見えて

いたのが、日本語を話せたり、日本語が片言でもフレンドリーな人がいたりすると、好感を持てるようになるのです。日本人の参加者は、外国人のことについても全部を悪く言わなくなりました。これは小さな一歩ですが、寛容さまではいかなくとも、その通過点であるということが見えてきました。



中国人住民が先生の中国語教室

藤沢:

交流の場や小さなステップをつくること。ナヤラさんはどう思われますか。

金城:

ブラジル友の会は昔から地域の中で交流をしてきましたが、行政は2、3年で担当者が変わり、多文化の活動に理解を示してもらえないことがあります。交流会をしても、互いに寄り添いたいという気持ちがないと意味がありません。お互いを知りたいという気持ちを生むためには交流会は必要ですが、形を変えた他の方法があると寄り添えるのかもしれない。

藤沢:

そこにアートの役割があるのかもしれない。「言えればいいというものでもない」という意見もありましたが、フフさんはどうでしょうか。

フフ:

それでも言葉に出していくべきだとは思いますが。それには岡崎さんみたいな調整役が必要かもしれません。地域、自治会、役所に一人でもいれようまくいくように思います。言わないと始まらないので、やはり言うことは大事だと思います。

藤沢:

お話を伺って思ったのは、日本人自身が一人で海外に行った経験がないことがとても大きいのかも

しれないということです。私は一人で海外に行き、数週間過ごしましたが、とても心細いし差別されることもありました。日本人だからという理由でいじめられたことも何度もあります。大人になってからもです。**若いうちに一人、二人で海外に行き、辛い思いを経験して初めて、日本にいる外国人の気持ちを少しは理解できるのかもしれない。**そういう体験の場や、日本にいる外国人の方々の中に一人身を投じる機会を作ってみるなど、まだ何かできることはあるのではと思いました。**日本人の立場で何となく交流だとか言っていますが、当事者の立場になる機会をもっと持つべきだということ**を学びました。

吉富：

我慢しない、そしてけんかを恐れない、時間がかかるなど、課題はいろいろあると思いますが、その中につなぎを仕掛ける人や、震災の経験、アートによる手法、そういうものを活用することで解決していくのではないかと思います。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム
クロージングセッション

「神戸宣言」の発表

田村:

地域における国際活動において重要な点をまとめた文書の原案を、実行委員会で作りました。昨日から今日にかけての議論を踏まえて書き直し、「神戸宣言」として発表したいと思います。質問や意見をお願いします。

永田:

爆竹を注意しに行って殴られたという第3セッションでの岡崎さんのお話ですが、そこに至るプロセスを変えたほうが良いと思いました。顔見知りではない人が激しく怒れば、怒られた方も腹が立ちます。

私は埼玉で高齢者の方を防災の担い手にするプロジェクトを行っています。海外の人は日本に住んでいると地震に恐怖を抱きますが、地震に関する知識を教えられる機会はなかなかありません。地元の高齢者がそのような教室を開けば、感謝の気持ちを伝えることができ、交流も生まれると思います。そういった活動をすでに始められているかもしれませんが、マイナスなことに触れるよりも、そのような関係性を作ったり、応援できないかと思い、発言しました。

田村:

日本人側に不満や怒りがあり、外国人側には不安があります。この二つはとても重要な視点で、それを踏まえた上でどうコミュニケーションするかを考える必要があります。

河合:

「神戸宣言」を読みました。ありがちなきれいな文章でしたが、実際はそれほどきれい事ではありません。ダイバーシティ&インクルージョンを信じてはいますが、プロセスに多くの時間がかかって、非

常に効率が悪いです。



ただし、そのあとに得られるものは、企業にとってはイノベーションであるとか、多様な人たちが参加できるというメリットです。それはコミュニティでも同じで、素晴らしいコミュニティを目指しているからこそ大変なプロセスを乗り越えるんだ、ということを書いておかないと、いざ大変な時に限界がくるように思いました。

質問者:

岡崎さんと金城さんに質問です。どういうことがきっかけで今の活動をされることになったのか、また、ご自身のどのような部分が活動にフィットしていると思われますでしょうか。どの部分がフィットしているのか、聞かせてください。

岡崎:

住み始めた頃は、大変だなと思うくらいでしたが、いろいろな人に話を聞いていくうちに本当に大きな問題だと感じるようになって、今の活動を始めました。私の立ち位置は、自分がこうしたい、これが正しいと誰かに押しつけるのではなく、現実に怒っている人や困っている人がいる状況を解決する場を作り、その経過を見守るものです。これが正

しいと押しつけられると、人間誰しも反発します。ですから、前向きな活動を展開して地域の変化を実感できる機会を作れるように、地域での調整が大事だと考えています。

金城:

私は両親の都合で来日しました。日本の学校ではいじめなどにも遭い、両親に怒りをぶつけたこともありました。しかし、そもそも両親が活動を始めたのは、私のためでした。私は今、自分と同じように困っている子どもが他にもいるという思いで活動を続けています。現在、ブラジル友の会はあまり活動できていません。



いろいろな思いが胸に去来していますが、その思いを引き継ぎたいという気持ちで活動しています。

田村:

私は中学生の時から金城さんを知っているので、さきほど河合さんがおっしゃった「様々なことを乗り越えた先に」という思いに特に共感します。今回のシンポジウムは、想像以上に面白いものでした。予想より深い議論が多かったので、「神戸宣言」の文章が浅く感じられました。本日議論されたキーワードを改めて掘り起し、最終的な「神戸宣言」をどのようにするか考えたいと思います。

柄:

長い時間、ありがとうございました。参加団体やモデレーターの方たちは昨日からワークショップなどを通じて、濃い時間を一緒に過ごせて楽しかったです。国際交流基金地球市民賞はこれまでに100を超える団体が受賞しています。自画自賛にはなりますが、良い団体が受賞していると思いました。良い団体の魅力を引き出してくださったモデレーターの方にも心から感謝いたします。ありがとうございました。

「神戸宣言」については、その後、参加者の皆様から多くのご意見を頂きました。すべてを反映することはできませんが、ここに一部をご紹介します。

「神戸宣言」に掲げられた理想が実現していくよう、当基金としてもこの地球市民賞を通じて応援していきたいと考えています。

- 「個人的に交流ができると、外国人というかたまりではなく、〇〇さんという一人の人間になる」というようなお話が出たと思いますが、私もそれは本当にそうだと気づいたことです。宣言の中で、「日本人住民と外国人住民が」というところは、例えば「住民同士が」といった分断されない言葉だといいなあと思いました。「異なる言葉、異なる文化をもった同じ人間なんだよ」というメッセージが込められた言葉だとうれしいなという気持ちです。
- シンポジウムの締めでも話題になった、「違いを認め合う」ということと、その後の「寛容」との間の段差を埋めるには、他に迷惑をかけないという気持ちで、とことん話し合うということが大切であると思います。「国際交流の真髄」がそこにあると思っています。今回の「神戸宣言」に、ぜひ取り入れて欲しい内容だと思っています。
- 「多様性を認めあう寛容な社会を創出するために、私たちはそれぞれの人が自分の強みや背景を表現し、最大限活躍できる社会をつくっていくことに力を尽くす。」という要素も入れたいところです。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

神戸宣言

私たちは、開港から150年の長い国際都市としての歴史を持ち、阪神・淡路大震災の経験をもとに「多文化共生」の概念を育んできた神戸において、「多様な文化をつみこむまちづくり ～国際文化交流の果たす役割～」をテーマに議論の場を持ちました。議論のなかから私たちは、多様な文化の共生には大きなエネルギーが必要で、また不寛容になりがちな社会との軋轢や、越えなければならない様々な障壁があることも学びました。

しかし、そうした軋轢や障壁を乗り越えた先に広がる、寛容で豊かな社会がもつ可能性についても、私たちは感じることができました。神戸に集った私たちが感じたこの可能性を、これからもより確かなものとしていくために、次の3つのことをめざします。

1. 異なる言語・文化的背景を持つ、住民がともに暮らすまちを作っていくためには、外国人住民と日本人住民がともに地域の未来を共有するパートナーとして活躍できる機会を創出する必要があります。そうした機会を創出するために、市民、行政、企業などと立場を越えて連携し、「つなぎ手」としての人・場・組織を育てます。
2. 震災の経験を乗り越えて形成されてきた「多文化共生」の概念が引き継がれ、東北や熊本の被災地でも外国人被災者ととともに復興への歩みが広がっています。これからは全国各地で、多文化共生の経験を交換しあい、市民、行政、企業などの立場を越えて議論する場を設け、外国にルーツを持つ人々が主体的に参加するまちづくりをすすめることで地域の多様な違いを包摂する豊かな社会を拓きます。
3. 日本人住民と外国人住民が互いに異なる言語・文化的背景を理解する上で、壁をつくらぬアートによる交流は、人と人をつなぎ、声なき声に耳を澄ませ、様々な異なる人を橋渡しする力があります。地域に根ざした料理や衣装、祭りなどを取り入れた異文化交流とともに、既存の枠組みにとらわれないアーティスト達の取り組みを一層推進し、様々な表現活動を通じて多様な価値にふれる社会を構築していきます。

2018年6月30日 神戸において
国際交流基金地球市民賞公開シンポジウム2018
参加者一同

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

参加受賞団体感想

様々な団体の方々とお話することができ、大変刺激になりました。普段とは違った視点で物事を考える貴重な機会となりました。

内容が濃いシンポジウムであったと思っています。第2セッション「人と社会をつなぐアートの可能性」でダンスボックスの横堀ふみさんがPowerPointで最後に示した、「違いを認め合う、寛容さ」という言葉は、私たちの寮の設立目的と趣旨にも書かれていることで、それを実現しようと半世紀つづけています。同じ内容が、アートの側の人から出て来たことに驚きました。

ワークショップでもシンポジウムの場でも、皆さんが感じている課題やあるべき将来像に強く共感することが多く、非常に勉強になりました。長く活動を続けていらっしゃる皆さんの課題や取組があり、まだまだ議論があるという今の現状を直接お話ししたり見学する中で「体感」できたこと自体が自分にとっては大きな経験になりました。東京とはまた違う、神戸独特の歴史や現状の取組を教えていただいたことも今後の活動に活かしていけそうな気がしています。シンポジウムで話に出ていた「違いを認め合う」ということや「人々が寛容になる」という点が課題の共通点で、それが今後に向けたキーポイントなのだとなれば、個々人同士の草の根交流は、地道に参加者を増やして継続していくことに意味があると、改めて感じた次第です。私たちも、常に時代の変化に合わせて事業を最適化し、発展させていこうと思います。

NPOの活動ではどうしても目の前のことで精いっぱいになってしまいますが、横のつながりやそれぞれの団体の様子を垣間見ることができ、客観的に国際文化交流を見つめ直す機会が得られたことは非常に良かったです。一つのテーマを掘り下げるワークショップを開催してもよいかと思います。今後も、定期的にこのような会を地方で開催していただければ、より理解が深まるのではと思います。

実は何か月か前に私自身が外国にルーツを持つことで通院関係で困ったことがあり、「支援される側」としてMICかながわの医療通訳サポートを利用しようか真剣に迷ったこともありましたが、今回「支援する側」として参加しており、日本の多文化共生推進を考える空間になると自分の立ち位置がわからない時が多いのですが、それを逆に強みとして利用するべきだと今回確信しました。いろいろな「先輩方」とお会いできたという意味でももちろんよかったです。そういった方でも悩んでいる、疲れているなど素の姿をみることができ、逆に安心しました。この先ずっと悩むし疲れるときもあるだろうけど、それでも今の活動をやり続けたいなと思えたのが嬉しかったです。たぶん数日後もまた振り返って、ここに書かなかった新たな発見があると思います。

皆さんの疲れ具合を考えたとき、やはり根本的に制度設計がない中で、できる限り交流してくださいというのが間違っているのではないのでしょうか。一生懸命やっている方々が制度的後押しがないために、疲れを感じているのでは。外国人を受け入れるとき、働き手や税金だけではなく、日本語学習支援から、社会保障、老後問題などを視野に入れた政策が必要ではないでしょうか。

地球市民賞の受賞団体の多様さに大変驚くとともに、自分の知らない国際文化交流の切り口を知ることができて貴重な機会になりました。一方で、芝園団地自治会のように、居住空間における多様な文化の共生、といった切り口で活動している方々が少ないため、団体の課題を共有して知恵を交換し合うといった点にまでは至りませんでした。

地球市民賞を受賞した団体の方々との意見交換会は大変有意義なものでした。より専門性の高い団体や芸術家は発信力が高い、あるいは日頃からの発信を十分に行っている背景から、つながろうと自主努力がなくても、先方からつながってくれる（他者を惹きつける）強みを持っているという点に納得しました。自分たちの強み、発信力を再考する機会となりました。どの団体も様々なことを行っている、わかりやすく、一つに絞った強みを上手に発信していくことが重要だと感じました。また、つながるということは、両者のプラス（わかりやすい実利だけでなく、イメージアップにつながるなどの間接的なものも含む）がなければ、つながることができないと議論になりましたが、こうしたアプローチを行うことは（芸術団体や専門団体と比べて）地域の国際交流協会の苦手な分野であると感じました。

盛りだくさんで消化不良の部分もあったが、国際文化交流の様々なフィールドでの実践のお話が聴けてとても勉強になりました。この次に続くアクションとして、団体同士のコラボレーションなどで実際のアクションにつながればと思いました。

いろいろお話を聞くとともに（学ぶとともに）、実際に活動している他の方とつながる良い機会を得られたと思います。彼らのように想いのある子達が引き続きリードして継続的にこのような課題に取り組んでいけたら良いなと思っておりますし、サポートしてあげられたらと考えております。

様々な団体の方々が、多様な切り口から日本の国際化（多文化化）に取り組まれていることを知ることができて、大変勉強になりました。このような機会が、多文化共生の発祥地である神戸で行われたこと、大変貴重な機会であったと思います。

それぞれの団体の熱意、また現在抱えている課題を学ぶ中で、新たに市民の方々を巻き込んだ国際交流、多文化共生や文化交流活動を広げていくための多くのヒントを頂きました。「ハナの会」の視察では、当地域においても、外国人住民（帰国者）の高齢化が始まっており、社会の中で、彼らを包摂していく仕組みが必要であると感じました。早速、中国相談員に報告したら賛同してくれたところです。一方、芝園団地でのご報告より、異文化や世代により、埋めることが難しい多くの問題があることを再認識しました。そこに若い世代（大学生）が入り、状況を変えていく力になっていったことなど、継続的に行動をされている姿を見習いながら、今後の当地域での活動を考え、実行に移していきたいと考えております。

「つながる」という視点において、人や情報をつなぐ組織・人・機会が足りていない現状が指摘され、震災から20年以上が経ち、今後の神戸が進む道が見えていないという問題も提起されたことに、形は違うものの自分の取り組んでいる状況に通じるものがあり、とても親近感を感じました。つながりは日頃からの地域内外でのつながりが重要で、かつ、相手の立場や気持ちを思いやるだけでは不十分であり、相手に入り込む努力も必要であると再認識いたしました。また、インバウンドについて、コミュニティでの話し合いが重要であり、来訪者だけ増えて、地元の人々の幸せにつながらなければ意味がないと指摘されましたが、現在推進中の事業への参考にしたいと思いました。

地球市民賞

フォローアップイベント 公開シンポジウム

参加者アンケート結果

つなぎと寛容さはよくとりあげられる言葉ですが、そこに思いをはせることができました。

長年、置き去りにされている日本の課題が話されて興味深いセッションでした。

このようなイベントを多く開催され、より幅広い人たちに情報提供され、何かが変わって行くことを祈念いたします。

地球市民賞つながりで、一般的に一緒にディスカッションすることが少ない団体がざっくばらんに討議されたのが大変興味深く意義があったと思います。

第3セッションのパネラーが素晴らしかった。こういう素敵な若者と一緒に何かしたいと思いました。

多文化共生社会構築へ向けたステップをしっかりと踏んでいくこと。様々なコミュニティをつなぐ仲間組織、コーディネーターが必要ということをおぼえました。人とのつながりの中で、外国人と日本人の交流が難しいことがわかりました。怒りや不安をお互いが持っている、なかなかうまくいかず、ぶつかって暴言、暴力につながってしまいます。そこにソーシャルワーカーが介入して、相互の思いをうまく調整していくことが大切だと思いました。

とても興味深いイベントでした。お話を引き出してくれたモデレーターの方に感謝です！
(多文化共生とアートとの関わりについての議論が深まるとさらによかったです。)

思っていたよりもインタラクティブなイベントで、とても有意義な時間でした。議論が深く、本質的で、私自身が日頃から考えては良い解決策が思い浮かばず…というものだったので、いろいろな立場、背景の人のお話を聞くことで大変参考になりました。



「つなぎ手」としての人、場、組織づくりという点が最も大切なポイントだと感じました。私の持論は、歴史的町並みには多文化を包容する不思議な力があるということです。町並みの中には、市場、路上カフェ、住居の縁側、広場、小劇場などの伝統的な空間が多くあり、そうした空間における日常的な出会いやコミュニケーションには、多様な人々の融和を促進し、対立を緩和する機能があると思っています。アジア各地で、そういう豊かな空間をそぎ落とす形で、鉄とコンクリートの現代都市化が急速に進みつつありますが、多文化共生という視点からも歴史的町並み保存の重要性があると思います。全面的な保存が無理なケースでも、新開発の中で伝統的な空間構成の知恵を継承していく必要があると思います。

第1セッションの「震災の経験から」の講演を聞いて、震災前後の活動や講演内容は学校の福祉の授業で学んだことがあったので、参考にしていきたいと思う。

神戸に人が集まる企画が良かったと思います。

インバウンドの進展に関するP & Gさんのコメントに同感です。ふつうに交流する姿が尊く、無理に外国側を呼び込むメリットが見当たりません。

地球市民賞

フォローアップイベント ワークショップ

はじめに

多様な担い手の連携による国際交流活動の推進に向けて

田村 太郎 実行委員代表 国際交流基金地球市民賞選考委員 一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事

地域における国際交流の推進においては、各地でNPOやボランティアなど「市民」による多様な活動が重要な役割を果たしていますが、そうした活動が行政や企業、大学など、多様な担い手と連携することでさらに大きな成果を生み、活動を広げていることが、過去の100を越える地球市民賞受賞団体の活動の経験から明らかとなっています。そこで基礎自治体としては最多となる7つの団体がこれまでに地球市民賞を受賞している神戸において、過去の地球市民賞受賞団体が集い、多様な担い手が連携して国際交流に取り組む可能性について議論を深めました。

ワークショップはまず、参加した団体からそれぞれのこれまでの活動の様子とこれから取り組みたいことの共有から始まりました。続いて神戸に縁のある企業による地域課題解決の考え方や事例についてのプレゼンテーションを受け、グループにわかれてディスカッションを行いました。

企業の取り組みについては、神戸に本社を置くネスレ日本株式会社から、同社の粉ミルクの商品化やコーヒーの販売に至るプロセスを解説して頂き、地域課題に目を向けその解決にあたることは同社の歴史そのものであることが紹介されました。また阪急阪神ホールディングス株式会社からは、沿線価値向上の視点から、地域での社会貢献活動を支援することを通じた地域課題へのアプローチについてお話し頂きました。

グループワークでは、地域の国際交流活動と企業との連携をテーマに、三つのグループに分かれて議論を行いました。参加団体から「これまでのとどろき」「これからやりたいこと」「企業との連携」の3点を共有しながら、ディスカッションを通してこれからの取り組みのヒントをさがりました。三つのグループから共通して出たのは、多様な担い手が会場の必要性でした。企業も情報を求めているが、地域で活動する団体とのつながりは少なく、また地域で活動する団体も企業や自治体、大学との接点は乏しい。また連携・協働するための場づくりには、抽象論や「連携のための連携」ではなく、できるだけ具体的な課題を設定す



ることが望ましい、といった意見が出されました。

会場となった「海外移住と文化の交流センター」は、戦前から多くの移民をブラジルなどへ送り出した国の施設として建てられたもので、現在は関西のブラジル人コミュニティやアーティスト支援のNPOが指定管理者として運営に携わるユニークな施設でもあります。ワークショップ終了後に参加者は施設を見学し、運営団体のひとつである「関西ブラジル人コミュニティ」によるブラジル料理を頂いて懇親を深めました。

翌日のフィールドトリップでは、開港当時に形成された外国人居留地や、移民を送り出す船が出航したメリケン波止場をバスから視察したのち、震災で大きな被害を受けた長田区で「神戸定住外国人生活支援センター」が運営する高齢者向けデイケア施設と、カトリック教会を核に市民団体が活動拠点を構える「たかとりコミュニティセンター」を見学しました。

神戸での国際交流活動は震災以前から活発でありましたが、震災で支援を受ける側になった経験によって、今直面している課題の解決だけでなく、長い目で社会や暮らしをよくしていくための視野を持つことができた、という声も聞かれました。「支援をする」「支援を受ける」という関係性だけでなく、「ともに未来を築いていこうとする意志」が多様な担い手の連携を深め、地域における国際交流をより実りの多いものとしていくことに気づかされた有意義なディスカッションとなりました。

地球市民賞

フォローアップイベント ワークショップ

企業の取り組みの紹介

ネスレ日本株式会社

コーポレートアフェアーズ統括部 ステークホルダーリレーションズ室
武藤 寿旭

ヨーロッパで栄養不足による乳幼児の高い死亡率が社会問題になっていた1866年、その課題を解決するためにアンリ・ネスレは栄養価の高い乳幼児食品を開発し、販売しました。まさにネスレは社会課題の解決からビジネスが始まった会社です。

ネスレ日本は現代日本の社会課題である地域コミュニティの減少、核家族化といった社会的孤独・孤立を解決するため、バリスタ*i*(アイ)×IoTで家族や友人とのつながりを生み出していこうとしています。また、神戸市とネスレ日本は「こうべ元気!いきいき!!プロジェクト」の推進協定を締結し、栄養や健康に関するノウハウを活かし、高齢者の生活の質の向上に貢献するとともに「ネスカフェゴールドブレンドバリスタ」を提供し、楽しみながら語らう場づくりを応援しています。神戸市内の76か所でスタートし、地域コミュニティの活性化に貢献しています。

さらに、被災地の方々に元気に過ごしていただけるよう、集いの場づくりを進め、県内45か所にバリスタを設置しました。



ネスレとソニーが共同開発したネスカフェコネクト。バリスタ*i*と専用タブレットをつないでタブレットと会話したり、LINEのメッセージを読み上げたり、情報検索も。

阪急阪神ホールディングス株式会社

総務部 課長(社会貢献担当)
相良 有希子

阪急阪神ホールディングスグループではグループ全体で進める社会貢献活動として「阪急阪神 未来のゆめ・まちプロジェクト」を実施しており、阪急阪神沿線を中心に、一人ひとりが関わる地域において、「未来にわたり住みたいまち」をつくることを目指しています。特に「地域環境づくり」、「次世代の育成」を重点領域としており、グループ各社や従業員、地域などの多様なステークホルダーとの協働により、単一の企業だけでは生み出せない大きな効果を得ることを目指しています。例えば従業員の募金を基にした助成金「ゆめ・まち基金」や交通広告での広報により、在住外国人の子ども達の学習支援をしている市民団体などの支援、小学生向けのキャリア教育プログラム、といった多様な活動を実施しており、何よりも「協働」を大切にしながら地域の発展に貢献したいと考えています。



地球市民賞

フォローアップイベント ワークショップ
グループディスカッション

グループディスカッション:企業との協働について

グループ1(若林):

アイセックの学生さんたちがホワイトボードにたくさん意見を詳細に記録してくれました。①これからやりたいこと、②外部とどのように連携したいか、自分たちが必要としていることを、それぞれ発言してもらいました。

①は、「地域内外の参加者、仲間を増やす」「地域の連携」「活動の輪を広げる中で自分たちの活動の意義を拡げる」という声が多かったです。「マイナスからプラスへ新しい価値の創造」「自分たちが必要としているサポートを顕在化させる」という発言もありました。

②については、「活動の拡大を考えるうえで必要な人手の確保を外部連携で得たい」「思いを共有できる仲間づくり」「思いのほか知られていない活動内容を周知するための連携」「連携できるリソースの発見・開発」「新しいサポート層の開拓」といった話が挙がりました。

参考になったのは、神戸の震災時にサポートを受けた経験から見えてきこととして、「外部から支援を受け、外部と連携することで、自分たちの中にあるコミュニティを自覚・認識できた」「他者を通じて、その違いを認識して強くなれた」という話です。

一方、これまでの経験から連携の難しさにも話が及び、「理解してほしくてもそれぞれのレイヤーがあまりにも違って同じ言葉をもつことが難しい」「連携時の目標のすり合わせがそもそも難しい」という指摘もありました。

活動メンバーの話が一回りしたところで、ネスレ日本の嘉納さんより、今企業が求めているものについてお話し頂きました。「企業としては、市民活動をしている皆さんがその地域で何に関心があり、何が課題なのかを知りたいので、情報交換の場をもつことが重要」とのことでした。興味深かったのは、企業は情報を求めているので、実は企業を訪問してもかまわないと話が展開したことです。企



業はオープンなので、市民団体が積極的に企業に赴き、まずは情報交換の場を作ることがこれからの連携に必要であり、そこに可能性があるのではないかという話になりました。

グループ2(荻原):

これからやりたいことについてのディスカッションもありましたが、これまでに実現した企業との連携の経験知を共有しようという話がメインになりました。

例えば豊田市国際交流協会はメンバーにトヨタの方がいて、団体の課題に対して社員がボランティアとして参加すると、社内で使えるポイントが獲得できるという仕組みがあるそうです。

また、長田での取り組みですが、地元企業が地域を活性化させたいという共通の目的をもち、それに対して何ができるかを一緒に考えています。プロジェクトを実施する側だけでなく、地元企業も資金は出せなくても場を提供できるとか、そうした資源を出し合うことが大切なのです。

プラス・アーツも、実際にどういうことをやろうかと企業と共に考え、パートナーとして事業をつくっています。まずミッションが合うかどうかを探り、それに合わせてプロジェクトをカスタマイズしていきます。団体側には企画力のある提案も必要で、そういう意味では対等な関係、立場で取り組んでいるということでした。

ほかには、**継続することで活動が共有され、価値化される**という話もありました。それが社員教育になるとか、企業が様々な価値観を取り入れることにつながっていきます。しかし、それは最初から意図したものではなく、続けていく中でお互いに気づいていったということでした。

また、それぞれの**団体の強み**、例えば企業内の国際化が進む中で、国際交流をしている団体として何が提供できるかななどを**明確にし、アピールしていく必要もある**との意見も出ました。

一方、本業であるからこそ踏み込めないリスクを企業は負えないという指摘もありました。CSR(企業の社会的責任)ではなく、CSV(共有価値の創造)において、**本業に対してマイナスになることはなかなかモデル化できません。事業を進めながら資金を投じるにあたって、企業はリターンを考えざるを得ませんし、その価値を示していく必要があります。**実利を求められる場合もあれば、企業ブランドへの貢献がどうなのかを問われる場合もあります。活動を通じて社会課題にアプローチしていることを、どう見せられるか、が重要です。

実はクリエイティビティの力も重要で、この企業がこのNPOと協働するとこれほど面白いことになるというアウトプットをどう示せるか。例えば、保護猫を助ける活動をしている団体が猫の外装を施したバスで全国を回ると、多くの人が関心をもってくれたという話があります。**最終的に、企画やアウトプットのデザイン力が大事**になるのです。

しかし、連携に結びつく、その最初の入り口がなかなかありません。出会う場をつくる**ハブとなるようなところも必要**だという意見が最後に挙がりました。それぞれの団体もっているコンテンツをわかりやすく伝え、団体の発信力を充実させていくと、様々な連携のきっかけになり、そうしたコーディネート役割や機能が重要とのことでした。

グループ3(吉富):

皆さんの話にあったような企業との連携を実施している団体もあれば、やろうとして失敗した、少ししか進まなかったなど、いろいろでしたが、共通課題として**市民団体への無理解の壁**がまだあるということでした。

企業にも社会貢献部署のあるところとないところがあり、連携できるところを増やすためには妨げとなる壁をどうにかしなくてはなりません。さらに、当事者が外国人の場合は、外国人ということも壁になります。日本人を連れていけば話を聞いてくれたという事があるので、壁がある中でどのように切り込んでいくかということも重要ですし、その際に、**企業にとってプラスとなることや、なぜそういうことをする**

のかというストーリーをこちらがきちんと説明する必要があります。共通の社会課題をともに当事者として考えられれば話は早いのですが、そううまくいきません。当事者意識をもたせるような説明力をこちらが身につけることも大事だと思います。そういったものがあって初めて一緒にものをつくり



出すところに到達できます。今日、SDGs(持続可能な開発目標)など、課題や目標はいろいろありますが、実際に大事なものは協働の中身であって、資金を渡す、モノを渡すということが協働なのではありません。したがって、**しっかりとした理念の共有**がないと様々な課題が出てきます。また、理念の共有だけではなく、現場においても、担当者が変わる場合には活動情報の共有などのメンテナンスをしていかないと伝わりづらくなることもあります。そこで、具体的に今後行うべきことは、**コネなどの具体的な情報をキャッチして、そこに到達するためのストーリーを整理したうえで、話し合いの場をもち、自分たちの課題を共有できるような企業を探す**ことです。

そして、協働の中身についても明確なメリットがあるということを示し、企業にとって目先の利益という意識を持たせるのではなく、企業の社員も大きな意味では社会の構成員として当事者なので、**協働することでとも社会を変えるというところまで、見極められるように話を進めなければなりません。**しかし、今できること、すぐ先を見据えてできることにまず着手するといった道筋を示すことも必要です。



地球市民賞

フォローアップイベント ワークショップ
フィールドトリップ

6月30日、シンポジウムの前に地球市民賞受賞団体の皆さまと、開港以来の国際都市神戸の歴史の足跡をたどり、震災を経て深化した神戸の多文化共生にゆかりの深い場所を訪ねました。田村さん企画、案内の充実した内容でした。

9:00



三ノ宮駅集合 旧居留地→東遊園地を通してメリケンパークへ

9:30



メリケンパークには神戸移民船舶記念碑があります。1908年に初めてブラジル移民船が出航したのを記念して2001年に建設されました。

10:00



メリケンパークから神戸定住外国人支援センターが運営するデイケアセンター「ハナの会」を訪問。まさに多文化共生の場でした。

10:30



「ハナの会」→若松公園の鉄人28号 若松公園は地域の防災拠点



たかとりコミュニティセンターがあるカトリックたかとり教会へ。人々が行き交う道路に面した掲示板には、阪神・淡路大震災当時の記録写真などを掲出しています。

10:45



たかとりコミュニティセンターを見学。



大震災の際、この後ろで火災が止められたということでも有名になったキリスト像。台座にはベトナム語、韓国朝鮮語、日本語の3言語で「互いに愛し合いなさい」という聖書の言葉が刻まれています。



施設内には震災から約20年間、コミュニティFM放送局として多様な市民が番組を作り、10言語で情報を発信してきたFMわいわいが併設されています。2016年からはインターネット放送局として活動を継続しています。



カトリックたかとり教会の聖堂内。教会の施設は、震災後、敷地内にペーパードームという仮設集会所を手がけた坂茂氏の設計により、2007年に建て直されました。

11:30



KIITOに到着



地球市民賞

フォローアップイベント ワークショップ

参加団体プロフィール

公益財団法人 京都国際学際の家(1985年、京都府)

1965年4月1日、吉田山の南、平安神宮の北(聖護院東町)に開寮した、京都で最初の民間の留学生寮。

日本最初の留学生と日本人学生と一緒に生活し「異文化共生」を育む「場」としてスイスとの国際協力で生まれる。入寮出来る留学生は、1ヶ国からは3人まで、日本人は1/3(約10人)という入寮制限。男女の比は1:1。京都の大学に学ぶ学生は、誰でも入居できる。これらの入寮制限と、大学教員家族がハウスペアレント(寮生活のチューター)として一緒に住み込み、食事会、会議、小旅行、スポーツ等の諸行事が組み込まれた「混住型」の共同生活によって、半世紀以上「出会いの家」の設立趣旨は守られ、維持され、これまでに81ヶ国から千人を超える世界の若者が集い、育ち、世界で活躍している。



公益財団法人 PHD協会(1988年、兵庫県)

1981年、ネパールでの医療活動に従事してきた神戸大学教授・岩村昇博士がPHD運動を提唱し、設立され、村づくりに取り組むアジア・南太平洋の若手人材を育成している。PHD運動は、アジア・南太平洋の人々に日本に住む人々の知恵、時間、技能、財などのうちの10%を分かちつというボランティア活動であり、これらの国々から平和と健康と村づくりに取り組む意欲ある青年を日本に招き、農業、漁業、手芸、公衆衛生などの知識や技術の修得を助け、その成果を母国の発展に役立ててもらおう人材育成を主な事業としている。帰国した研修生たちが自分たちの地域に留まらず、地域の社会的な弱者のために活動を展開している。



浦安市国際交流協会(1990年、千葉県)

浦安市国際交流協会は「多様な文化と人がともに支え創造するまち・浦安」を目指して活動しているボランティア団体。浦安市は近年、人口増加が著しく、旧住民と新住民の間でさまざまな課題を抱えていた。そこで、外国人のための日本語教室、姉妹都市オーランドとの「友好の翼」による交流、外国文化の紹介、外国人との地域友好サロン、多言語による通訳・翻訳支援、ホームビジットやホームステイの開催、ボランティアが運営する外国語教室など、多岐にわたる活動を行い、地域の国際化を進めている。



公益財団法人 豊田市国際交流協会(2001年、愛知県)

「国際化の主演は市民である」という理念のもと、1988年10月の設立以来、交流・理解・共生を三本柱に、異文化やいろいろな人と出会うための各種交流会、お互いを知るための各種講座、そして共に生きる社会のための仕組みづくりまで、市民主体の国際交流事業を展開してきた。

なかでも活動の大きな特徴は、ボランティアグループがそれぞれ目的を持って積極的に活動していることである。通訳や英語でのイベント企画、外国人住民との交流、日本語の指導、教育支援、海外への支援といったさまざまな活動をしているグループのほか、通訳・翻訳、ホームステイやホームビジットの受入れなどの形で個人ボランティアとして活躍する場もあり、毎年約300人の方に登録していただいている。さまざまな文化を理解し、尊重し合い、「共に生きる」多文化共生の社会を目指している。



特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター(2002年、兵庫県)

多文化共生のまちづくりに取り組む9つのNPO/NGOの集合体である。その前身であるたかとり救援基地は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災直後にカトリックたかとり教会内に自然発生的に誕生し、活動している長田区は、震災前からインナーシティの典型とされ、震災当時全住民の8.0%(神戸市全体では2.9%)にあたる23か国1万382人もの外国人が生活を営む地域であった。たかとり救援基地に集まったボランティアたちは、救援活動の中で困難な立場に置かれた人々の存在に気づいていく。その気づきが、行政組織では対応しきれない“最後の一人”までを視野に入れた救援活動に結びついていった。そして、被災者と膝を突き合わせながら活動に取り組むことで、震災で生じた問題だけでなく、それによって顕在化した問題に対処していく形で「多文化共生」のまちづくりという新たなミッションを構築している。



特定非営利活動法人 芸術と計画会議C.A.P.(2007年、兵庫県)

芸術と計画会議(C.A.P.)は、アーティストの考え方や、作品の完成に至るまでのプロセスも芸術活動ととらえ、アートと社会を結ぶアーティスト・イニシアチブの団体として創設され、アートをめぐるコミュニティを創造的な方法で育ててきた。さまざまな分野のアーティストがネットワークを組んで活動、アーティストによる自主的な活動は行政を動かすまでになった。また、世界のアーティストとの交流や国際共同プロジェクトを実施するなど活動の輪が文化や国を超えて広がり、地球市民としてのアーティストの活動モデルとなっている。



特定非営利活動法人 ダンスボックス(2010年、兵庫県)

ダンスボックスは、コンテンポラリーダンスを通じた国際交流や地域活性化を目指し活動しています。ダンス芸術の「自己表現の力」、「コミュニケーションを創る力」、「国際性」を現代社会に活かし、市民がより豊かな生活を享受できる環境をつくること、またダンスを通じて豊かな感性をもつ子どもの育成、および人と自然が共生できる文化的なまちづくりの推進を図ることを目的としている。



特定非営利活動法人 ブラジル友の会(2011年、岐阜県)

ブラジル友の会は、人口の約1割を外国人、主に日系ブラジル人が占める美濃加茂市で、在住外国人が地域にとけ込み、地域に貢献できるよう、生活や教育相談、就労支援や起業支援まで幅広い活動を行っている。代表者が、教師でもあったため、進学や受験をあきらめてしまう子どもに、適切な情報の提供と助言が必要であることから、ブラジル人同士で助け合う自助組織を立ち上げた。広く地域の在住外国人の自立を支援する定住外国人支援センターとして、言葉の問題や、文化や習慣の違う国の住民と日本人住民の橋渡しとなっている。



特定非営利活動法人 ザ・ピープル(2011年、福島県)

ザ・ピープルは1990年、町の問題を、自分たち自身が考え、その解決のために主体的に行動することを目的として設立された。資源のリユースとして古着のリサイクルのチャリティーショップを運営し、その利益で海外の恵まれない地域の自立支援を行っている。東日本大震災直後より、全国からの物資やボランティアを率先して受け入れ、小名浜地区の災害(後に復興支援と改称)ボランティアセンターを創設し、運営の中核団体として在住外国人および被災者支援や雇用創出、被災した農地で有機農法によりコットンを育てるふくしまオーガニックコットンプロジェクトに取り組んでいる。



認定特定非営利活動法人 多言語社会リソースかながわ(MICかながわ)(2013年、神奈川県)

多言語社会リソースかながわ(MICかながわ)は、「人種、国籍、文化に関わらず、誰もが安心して医療を受けられるような社会にしなければならない。」という強い思いを共有する外国籍住民を支援するボランティア、医療関係者そして外国籍住民自身等によって、主として多言語による医療通訳の養成と派遣を行うボランティア団体。外国人の受入環境を充実させること、医療や介護など専門性の高い分野で言葉の壁を取り払うこと、実態に即した医療通訳認証制度の提唱に取り組んでいる。当法人の活動は、今後日本全体が取り組むべき課題の一つを提示している。



写真提供：神奈川県

特定非営利活動法人 プラス・アーツ(2014年、兵庫県)

混沌とする現代社会の中で、社会におけるさまざまな分野で沈滞化し、活力を失っていたり、大きな課題を抱え障壁に直面していたり、行き場を失い方向性を模索したりしている状況を目の当たりにする。社会が複雑化していくなかで、人々のニーズは多様化し、これまでの常套手段が通じなくなったり、一つの専門性では問題解決を図れなくなってきたり、そうした局面を打破するためには、規制概念にとらわれない新たな発想や新しい価値観に支えられた無限の可能性を秘めた創造力が必要とされていると言えるのではないだろうか。こうした社会背景の中で、特定非営利活動法人プラス・アーツは『教育』、『まちづくり』、『防災』、『福祉』、『国際協力』といった社会の既存の分野に対して“アート”そのものを持ち込むのではなく、アートの発想やアーティストの持つ既存概念に捉われない創造力を導入し、それらの分野がそれぞれ抱えている様々な課題や問題を解決し、再活性化させることを活動目標に掲げている。



特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター(2015年、兵庫県)

神戸定住外国人支援センターは、阪神・淡路大震災を機に発足し外国人住民への日本語教室、子どもたちへの学習支援、外国人高齢者の介護事業へと活動の幅を広げてきた。外国人のための活動は文化背景ごとに分かれがちだが、当センターは国籍や民族を超えて人々が地域で活動できる貴重な場である。日本で暮らす外国人は200万人を超え、豊かな生活を共に送ることができる地域作りが喫緊の課題である。定住外国人の青少年や高齢者支援などの当センターの経験は、ベトナム難民や中国帰国者の支援に活かされ、他地域のモデルとなっている。



一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団(2016年、熊本県)

1993年の設立、多文化共生事業や地球市民育成事業等を通じて、地域のグローバル化の課題に、市民レベルで取り組んでいる。日本語支援ボランティアの協力で「くらしのにほんごくらぶ」を開催するなど外国人住民とのつながりをつくる一方、熊本の歴史や文化を国際的な視点で学ぶグローバルカレッジやフェアトレードへの取り組みを通して、市民の国際化も推進している。2016年の熊本地震では、外国人避難対応施設の開設、災害情報の多言語化を実施し、日常の地域の“つながり”が大きな力を発揮した。“多文化パワー”と“地域の力”をキーワードに活動している。



芝園団地自治会(2017年、埼玉県)

芝園団地自治会は、1981年に設立後、約40年にわたり、住民福祉の向上、住環境の整備などの活動をしてきた。2017年12月1日現在、人口約4,800人の内、約2,500人が外国人住民で、その9割以上が中国人住民である。また、60代以上の日本人住民と、20代後半～30代の外国人住民が住む「将来の日本の縮図」といえる。生活習慣の違いから生じる両住民の溝を埋めるべく、外国人住民に自治会役員を担ってもらったり、地元外の学生団体「芝園かけはしプロジェクト」と協働し、「中国人住民による中国語教室」など、外国人住民が主体的に活躍できる場を設けたり、外国人住民向け自治会パンフレットを両住民で共に作成したりしている。また、中国版LINEといわれるSNS「ウェイシン」で情報発信などを通じて、問題の緩和と交流の促進の両面から「多文化共生の地元づくり」を推進している。



特定非営利活動法人 Nagomi Visit (2017年、東京都)

日本に住む一般家庭が、訪日外国人旅行者を自宅に招き、家庭料理を食べながら2、3時間の国際交流を行う活動をしている。両者が単なる「お客様とおもてなし係」として当日限りの交流を消費してしまうのではなく、両者が友人として腹を割って話ができる交流をすることこそ、個人個人の視野が広がる鍵であり、「同じ釜の飯を食う」ことは、初対面同士の心理的なハードルを一気に下げる手段であると考え、「ちょっとしたことだけど、素敵な思い出」を持つ人がゲストやホスト両方の立場で増えていくことによって、世の中の、特に無理解が原因で起こっている差別や無関心を減らすことを目的に、活動している。

人的にも財政的にも最小限の体制でなされているが、寄付金や補助金に頼らず、持続可能性が高く、ウェブを活用した国際交流活動として先進的な取り組みを行っている。



特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター(2017年、神奈川県)

横浜市初黄・日ノ出町地区は、2000年代初頭、売春等を行う違法特殊飲食店が急速に増え、住民が近づきたい街になっていた。住民の声をきっかけに斉摘発が行われ、2008年、高架下にアートを生かしたまちづくりがスタートし、黄金町エリアマネジメントセンターが2009年に設立された。関係者の緊密な連携のもと、安全・安心の回復と日常的な賑わいの創出を進めてきた。地域一帯が舞台のアートフェスティバル「黄金町バザール」の開催を中心に、地域の新たな魅力を内外に発信し、アジア諸国を中心としたアーティスト・イン・レジデンス交換プログラムを積極的に行っており、外国につながる住民も多数暮らす同地域で、アーティストが人々の交流の橋渡しをしている。課題に正面から向き合い、地域の可能性を日常的に模索し、真摯で地道な文化交流を続けている。



Photo: Ryudai Abe

地球市民賞

フォローアップイベント

参加者

フォローアップイベント参加者

1、過去の受賞団体(受賞年順)

| | | |
|----------------------------------|---------------|----------|
| 公益財団法人 京都国際学生の家 | 理事長 | 内海博司 |
| 公益財団法人 PHD協会 | 事務局長 | 坂西卓郎 |
| | 遠藤響子 | |
| | 酒井萌乃 | |
| | 清水悠加 | |
| 浦安市国際交流協会 | 会長 | 白木聖代 |
| 公益財団法人 豊田市国際交流協会 | 塚本江美 | |
| 特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター | 常務理事 | 吉富志津代 |
| | 理事 | 大城ロクサナ |
| | 理事 | 村上桂太郎 |
| 特定非営利活動法人 芸術と計画会議(C.A.P) | 代表 | 下田展久 |
| | 谷川武四郎 | |
| 特定非営利活動法人 ダンスボックス | エグゼクティブディレクター | 大谷燮 |
| | プログラムディレクター | 横堀ふみ |
| 特定非営利活動法人 ブラジル友の会 | 理事 | 金城ナヤラナツミ |
| 特定非営利活動法人 ザ・ピープル | 理事長 | 吉田恵美子 |
| 特定非営利活動法人 多言語社会リソースかながわ(MICかながわ) | 理事 | 岩本弥生 |
| 特定非営利活動法人 プラス・アーツ | 理事長 | 永田宏和 |
| | 宮田純子 | |
| 神戸定住外国人支援センター | ゼネラルマネージャー | フフデルゲル |
| 一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団 | 事務局長 | 八木浩光 |
| 特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター | 事務局長 | 山野真悟 |
| | 立石沙織 | |
| 芝園団地自治会 | 事務局長 | 岡崎広樹 |
| 特定非営利活動法人 Nagomi Visit | 代表理事 | 楠めぐみ |
| | 副理事 | 真田ありさ |

2、神戸市所在企業

| | | |
|------------------|-----------------------|-------|
| ネスレ日本株式会社 | コーポレートアフェアーズ統括部 | 嘉納未来 |
| | 富田英樹 | |
| | 武藤寿旭 | |
| 阪急阪神ホールディングス株式会社 | 人事総部室総務部 | 相良有希子 |
| P&Gジャパン | ガバメントリレーションズシニアマネージャー | 河合誠雄 |

3、神戸市

| | | |
|--------|----|------|
| 神戸市国際部 | 部長 | 植松賢治 |
|--------|----|------|

4、地球市民賞選考委員(元委員含む)

| | | |
|-----------------------|------|-----------------|
| 公益財団法人 墨田区文化振興財団 | 常務理事 | 荻原康子 (平成28年度まで) |
| 一般財団法人 ダイバーシティ研究所 | 代表理事 | 田村太郎 |
| シンクタンク・ソフィアバンク | 代表 | 藤沢久美 |
| プロジェクト・コーディネーター/プランナー | | 若林朋子 |

5、国際交流基金

| | | |
|--------|-----------------|------|
| 国際交流基金 | 理事 | 柄博子 |
| | コミュニケーションセンター部長 | 上野宏之 |
| | 熊倉美聡 | |
| | 那波育子 | |

地球市民賞

フォローアップイベント

運営協力いただいたボランティアの
皆さん

田村委員の3人の教え子の皆さんと、P&Gジャパンの河合さんにご紹介いただいたアイセック神戸大学委員会の皆さんには、2日間にわたってボランティアとして運営をお手伝い頂きました。初顔合わせにもかかわらず、的確に動いてくださったおかげで無事にシンポジウムを進行することができました。また、ワークショップ、シンポジウム共に熱心に参加くださり、感想も頂きましたので掲載いたします。

スタッフとして参加してくださった皆さん、2日間ありがとうございました！

| | |
|--------------|--------|
| 田村委員の教え子の皆さん | 荒木 玖美 |
| | 駒池 あすか |
| | 山田 奈波 |
| アイセック神戸大学委員会 | 石川 遼 |
| | 木本 麻衣子 |
| | 高畑 拓海 |
| | 坪田 悠花 |
| | 濱田 凜 |
| | 久末 敏博 |
| | 藤島 梨沙 |
| | 宮崎 勇佑 |

感想

こんなにも日本人と海外の人とのスタンダードが違うことに驚いた。日本にいては気づけない良さや悪さも比べると違いが顕著になった。自分も無意識に自分と違う人にはそういう目を向けていたかもしれないと思って反省した。みんなを同じに扱うことはできないけど、お互いを尊重し合いながら共存ではなく共生を進めていくことが平和な社会を実現するために不可欠だなと思った。

日常の人間関係は面倒だと捉えられがちで、日々避けて生活してしまったりするが、いざというときにはなくてはならない存在だと気づくのだと思う。ただ、いざというときにはすでに遅く、その時を見越して活動している人はすごいなと思った。普段から人といい人間関係を築いていくことが求められると思った。



イベントを通して「つなぐ」「寛容」という言葉が一番強く印象に残っています。「心の中に見えない国境がある」というお話があったように、外国にルーツを持ちながら日本に住んでいる方のお話を聞いて、日本に根強く存在する心理の壁を実感しました。また、それと同時に「diversity inclusionは効率が悪いが、達成したのちの利益がとてつもなく大きい」というお話から、多文化共生への希望も湧きました。イベント当日の準備を手伝わせていただいていた中で、様々なノウハウを学ぶこともできました。

熊本地震や九州豪雨を経験し、関西に来てからも地震や豪雨を経験しており、つながりについて自分も深く考えることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

社会問題や身近な問題を解決するために様々な方向から取り組んでいる方々の姿を間近で見られて良かったです。また自分が先陣を切って周りの人を巻き込んで活動して行く人こそAIESECが輩出していかなければならないと改めて感じました。これから自分がどう行動していくべきかをしっかりと考えていこうと思います。

自分の人生をかけて何かの問題を解決しようとしていたり、人を助けようとしている、そのようなカッコいい大人にたくさん会えてよかったです。社会を変えるため、大切な人を助けるために、自分から動いていけばいいのだということを、再認識することができました。

いろいろな方向から日本をよくしようとする活動をしている方たちの貴重なお話が聞けてよかったです。また同時にそうした価値ある活動をしているにも拘らずたくさん問題を抱え、その活動の継続自体が厳しい団体があるという事実も一つ日本が向き合わなければならない問題だなと痛感しました。今回の学びやつながりを今後の自分達の活動の糧にして頑張りたいと思います。

実際にハナの会やたかとりコミュニティセンターに行ったり、また、生の声が聞けたことが良かったです。「つながり」の大切さがよくわかりました。



地球市民賞

フォローアップイベント

終わりに

多様なものを多様なまま、多様につなぐことの重要性

～ワークショップ・シンポジウムをふりかえって～

2日間にわたって開催されたワークショップ「多様な担い手の連携による国際交流活動の推進」と、公開シンポジウム「多様な文化を包み込むまち」のオープニングセッションと3つのトークセッションから、私たちは様々な背景を持ちながら多様に存在する文化や暮らし、コミュニティを多様なまま受け入れ、またそれらが多様な場や機会につながっていくことの大切さを学びました。開港から150年を越える国際都市として、また阪神・淡路大震災からの復興のプロセスで「多文化共生」のまちを育んできた神戸という地が集ったことによる効果もあったでしょうし、日ごろから国際交流に取り組むまさに多様な団体の中でも、「地球市民賞」という伝統と名誉のある賞を受賞した団体が一堂に会したことによる相互のエネルギーによる影響もあったかもしれません。

この2日間に凝縮されたパワーから産まれた成果は、企画の段階から繰り返された様々な主体の、より良い社会を作りたいという熱意に寄るところも大きいと感じています。歴史ある海外移住と文化の交流センターを会場にしたワークショップでの、地域や世代、国籍、属性を越えたディスカッション。猛暑となった今年の夏の幕開けにふさわしい暑さの中、神戸の多文化スポットをめぐるフィールドトリップ。そして行政とNPOと企業のキーパーソンによる鼎談に始まり、3つのテーマでのトークセッションを展開したうえに、今後の地域における国際交流の指針となる宣言もまとめようという試みに挑んだシンポジウム。多少欲張りすぎたかなと思うところもありましたが、最後の最後まで本気で向き合ってくださった当日の参加者の皆さんや、企画委員とともに企画を練り上げた神戸の受賞団体の方々、主催者である国際交流基金の皆さんとともに本事業のプロセスに関わらせて頂いたことは、本当に幸運でした。

国際交流をテーマにした議論は、予定調和で表面的な議論に終始してしまうことも少なくありません。しかし、この2日間に共有された取り組みやオピニオンは、どれも地域の暮らしに立脚し、悩みや不満、不安を抱えながら、ときには激しくぶつかりあうこともある生々しい社会の現実をヒリヒリと感ずるものでしたし、またそうした現実を直視しつつも寛容で明るい未来を切り開こうとする強い意志も同時に感ずることができるものでした。きれいな言葉で課題を見えなくするのではなく、地域にある不満や怒り、不安にもきちんと向き合って、多様なものを多様なまま、多様につないでいくプロセスこそが「多文化共生」というファイティングポーズの意味なのだということに気づかされた二日間でした。

「神戸宣言」に凝縮されたこの2日間の化学反応の成果を、これからの国際交流の振興や、持続可能で誰も取り残さない地域の未来を切り開いていくための指針として、各地で共有し、反芻し、血肉としていただければと願います。

実行委員代表 国際交流基金地球市民賞選考委員
ダイバーシティ研究所 代表理事
田村 太郎

スナップ写真





国際交流基金地球市民賞は、1985年、全国各地で国際文化交流活動を通じて、日本と海外の市民同士の結びつきや連携を深め、互いの知恵やアイデア、情報を交換し、ともに考える団体を支援する賞として創設されました。最初の名称は「国際交流基金地域交流振興賞」、2004年には「国際交流基金地域交流賞」、2005年からは「国際交流基金地球市民賞」に改称し、現在に至っています。応募団体の対象活動は「文化芸術による地域づくりの推進」「多様な文化の共生の推進」「市民連携・国際相互理解の推進」の3分野で、先進性、独自性、継続性、将来性、社会への影響という5つの選考ポイントを中心の選考基準で公益性の高い国際文化交流活動を行っている日本国内の団体。が対象となっています。(団体の法人格は問いませんが、地方自治体は対象としません。)

JAPAN FOUNDATION  国際交流基金

国際交流基金(The Japan Foundation)は1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年10月1日に独立行政法人となりました。世界の全地域において、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流の3つの分野を柱として、本部、京都支部、3つの附属機関(日本語国際センター及び関西国際センター)、さらに25の海外事務所(うち2つはアジアセンター連絡事務所)をベースに活動しています。

国際交流基金地球市民賞 フォローアップイベント -多様な文化の共生-
編著・発行/国際交流基金 コミュニケーションセンター (株)ファアロ
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1 TEL:03-5369-6075 FAX:03-5369-6044